

2. 調査の概要

今年度調査地区の基本層序は、第1層・現代の盛土・擾乱、第2層・旧耕土、第3層・床土、第4層・灰茶色砂質土、第5層・灰褐色粘質土、第6層・暗灰色砂質土で第7層上面が遺構面になっている。

第4層以下に遺物が含まれ、第4層に中世、第5層に古墳時代から中世、第6層に古墳時代の遺物が含まれている。また、北側では第6層がみられず黒褐色粘質土の堆積がみられ、古墳時代の土師器を多量に含んでいた。

検出遺構

検出された遺構には、井戸状遺構、掘立柱建物の他、多数のピット、溝等がある。

SE01

井戸状遺構（SE01）は、径約2mの不整円形を呈し、深さは約1.5mのものである。果して井戸として機能したか明らかにすることはできなかったが、埋土からは多くの遺物が出土しており、井戸底より口縁部を欠いた壺、完形の小形壺、壺が出土している。また、注目すべき遺物として滑石製の勾玉、双孔円盤、白玉が出土しており、この井戸状遺構が単なる井戸ではなく、祭祀に関連したものであったと考えられる。時期は、出土した土器等から、古墳時代中期後半のものである。

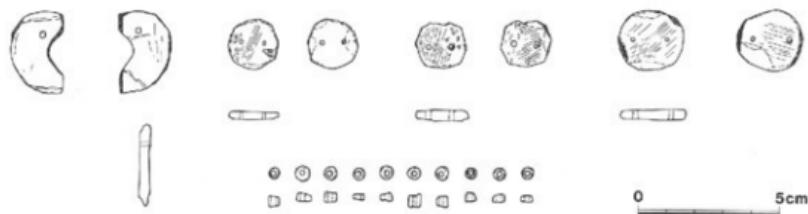


fig. 230 SE01出土滑石製品実測図

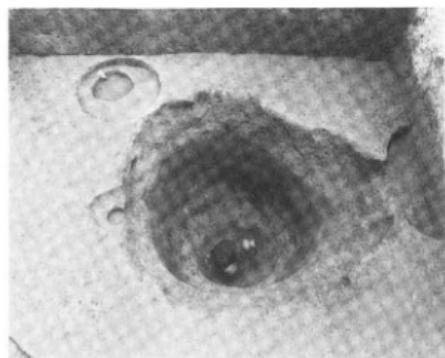


fig. 231 SE01

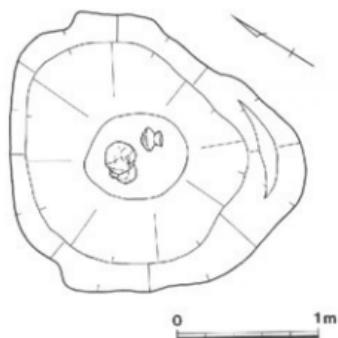
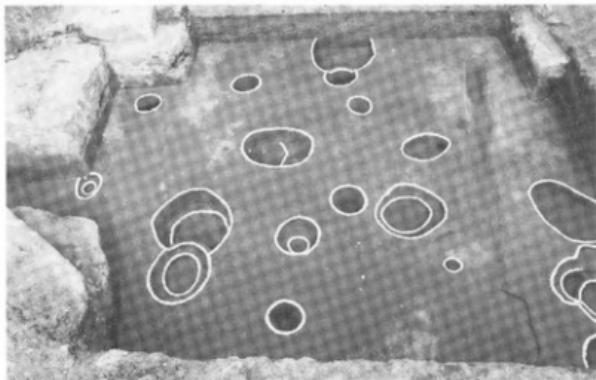
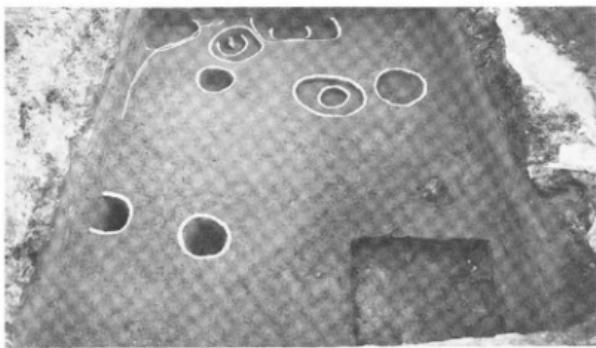


fig. 232 SE01平面図

- SB01** 掘立柱建物（S B 01）は、 2×3 間（柱間約2m）以上で、時期については掘形内より出土する土器がすべて古墳時代のものであるため、古墳時代の建物である可能性が高いものといえる。
- SB02** 掘立柱建物（S B 02）は、 3×3 間（南北4.8m、東西5.6m）で東西に長い建物址である。掘形は、一辺約1mを測る大型のものではほぼ正方形を呈している。磁北を意識して作られたものと思われ、南北軸がほぼ磁北に沿ったものになっている。時期の断定は困難であるが、掘形内より出土した土器には奈良時代から平安時代と考えられるものがあり、建物時期もほぼその時期ではないかと推定される。
- SD04** 溝（S D 04）は、一部が検出されたのみで幅等は不明である。埋土には粗砂・シルトなどの堆積がみられ流路であったと考えられる。遺物には須恵器は含まれず、弥生時代から古墳時代前半の遺物が含まれていた。他にピット、溝などが多くあり、古墳時代から奈良時代の遺物が出土している。



14. 神室遺跡

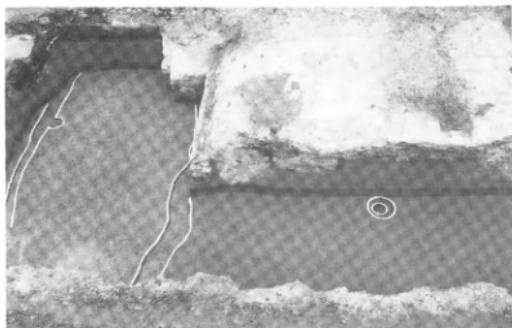


fig. 235
調査地西半北(西から)

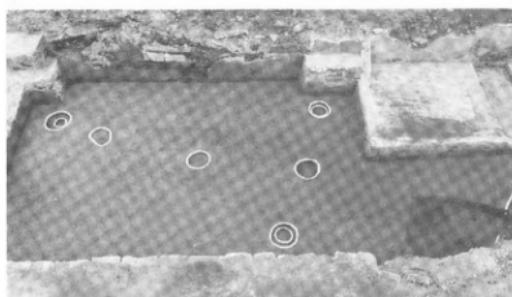


fig. 236 同上

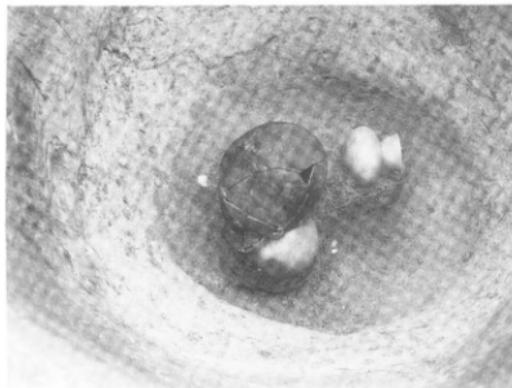


fig. 237
S E 01土器出土状況

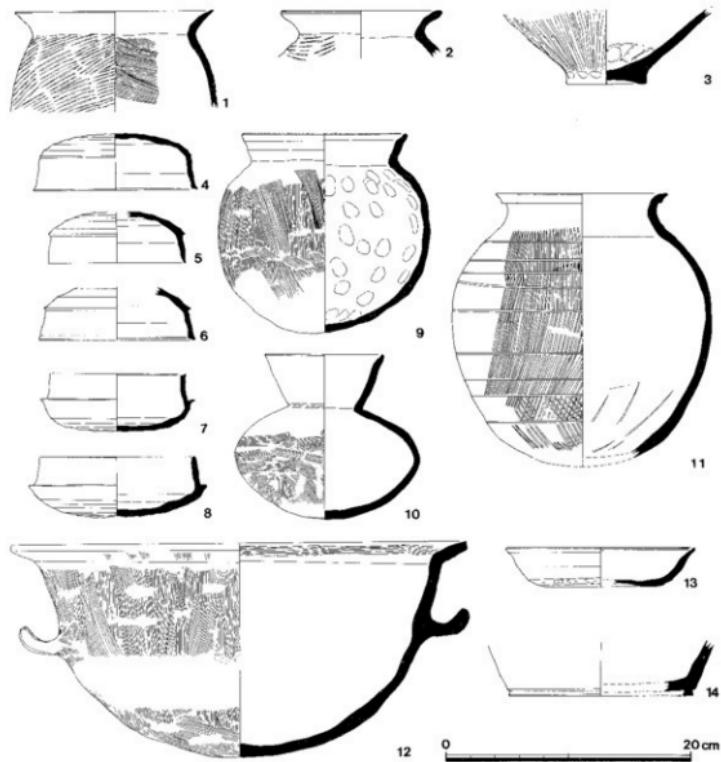


fig. 238 出土土器実測図 1～3 : SD04 4～11 : SE01 12～14 : ピット

3.まとめ

今回の調査において、神奈遺跡の重要性が再認識される結果となった。井戸状造構より出土した滑石製品は、古墳時代の祭祀を復元するにあたり非常に重要なものであり、滑石製品の出土は、玉造り工房址の発見された西区新方遺跡を除けば、一造構の出土としては市内最多である。

また、掘立柱建物は正方形の大型掘形で、奈良時代から平安時代のものと推定されることから、八部郡衙との関連が、これまでの調査成果とも考え合わせるとますます深まつたものといえる。

今後の調査によって、神奈遺跡の実態がより明らかとなるであろう。

ゆきのごしょ
15. 雪御所遺跡

1. はじめに

湊山小学校が位置する雪御所町は、その町名が示すように、平清盛が福原京遷都を志した頃に造営された別荘「雪御所」の比定地とされている。現在、校庭の南端には明治41年の校地工事の際発見されたという花崗岩に刻まれた「雪見御所旧跡」の石碑も置かれている。

雪御所遺跡は湊川の源流である天王谷川と石井川にはさまれた丘陵突端部に位置する。これまでにも、湊山小学校周辺では遺物が再三採集されており、弥生時代末～平安時代にかけての遺跡であることが判明している。

また、周辺の遺跡では、縄文時代～鎌倉時代の複合遺跡である楠・荒田町遺跡がよく知られており、神戸大学附属病院構内では平安時代後半の掘立柱建物や堀が確認されており、今後の調査に福原京の遺構確認の期待が寄せられている。

今回の調査は湊山小学校校舎改築とともにもので、これまでに何度も試掘調査が実施され、埋蔵文化財の存在が確認してきた。この試掘調査の成果をもとに、工事によって破壊される部分について発掘調査を実施した。



fig. 239 調査地位図 1:5,000

fig. 240
調査地北半下層全景

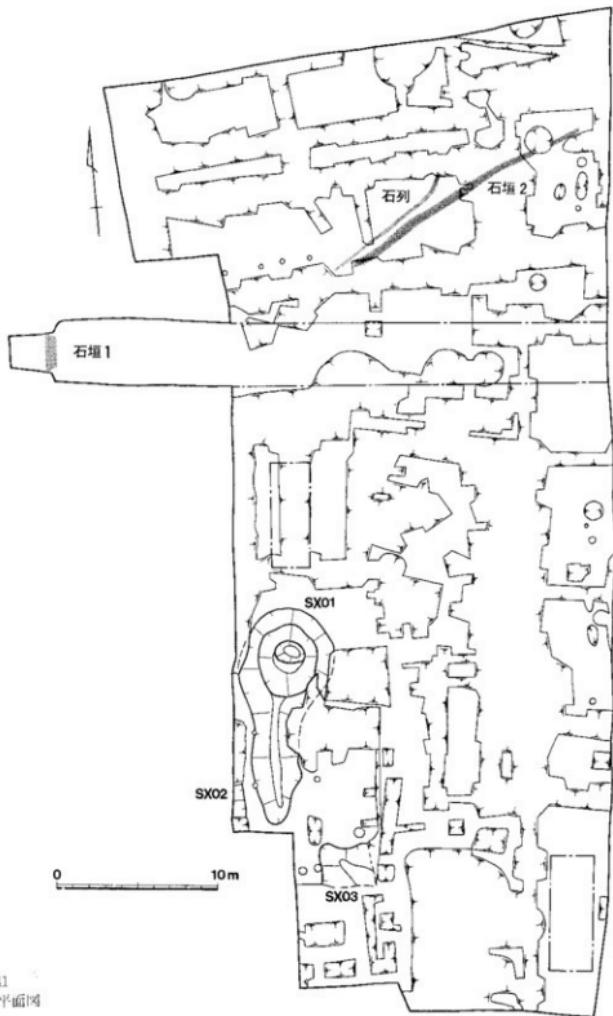


fig. 241
調査地平面図

2. 調査の概要 調査は依頼者から排土を場外搬出しないようにとの指示があったため、排土を反転しながら、北半と南半の2つの調査区に分けて順次実施することとした。なお、調査区の南東隅をA 1区とし、北へ数字で、西へアルファベットで調査区を10m毎に便宜的に区割りしている。

検出した遺構には、石垣2、石列1、落ち込み3（SX 01～03）などがある。旧校舎による擾乱が著しく、遺構の遺存度は悪かった。

遺構 まず、基盤層は土石流によって形成された円礫を多く含む赤黄色の細砂～粗砂で、西から東へと緩やかに傾斜して、天王谷川の川底へと下がっていく。この基盤層の上に、西側から黄褐色の砂礫層が堆積する。

石垣1 そして、D 4～5区の石垣1がこの地形を若干整形して築造される。南北方向に延びる東面する石垣で、確認長1.8m、基底より高さ1.1mを測る。3～4段に花崗岩の自然石を使って積み上げられている。裏ごめには暗褐色系統の粘質土が充填されており、平安時代後半の土師器・瓦を若干包含していた。石材にはノミ痕等の調整は全く確認できず、その年代は判然としないものの、積み上げ方法よりみると近世を遡るものでないことは確実であろう。この後、石垣1を境として、西側はほとんど変化が見られないものの東側は川によって運ばれた粗砂層が厚く堆積していく。このようにみてくると、石垣1は東に流れる天王谷川の護岸のために築造されたものと考えて大過なからう。

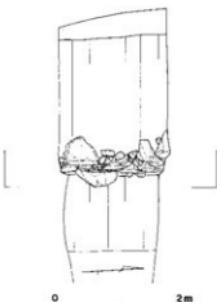


fig. 242 右垣1平面・立面図

石列・石垣2 また、この粗砂層の堆積過程において遺構面としては不安定であるが、暗褐色砂質土層による畦畔状の上層が見え、ほぼ同一面で石列(B 5区)、石垣2（A 5・B 5・A 6区）等の遺構が営まれている。両遺構は畦畔状土層との関連で圃場の段に設けられたものと推定できるが、確認は得られなかった。時期は遺構を覆う乳褐色粗砂層より陶磁器片を検出している点から、近世でも後半以降に位置づけられるものと考えられる。

そして、最も新しい遺構面上にのるのが、B-C-2-3区で検出したSX 01～03の遺構である。ここでは特にSX 01について述べておこう。



fig. 243 石垣 2 全景



fig. 244 石垣 1 近景

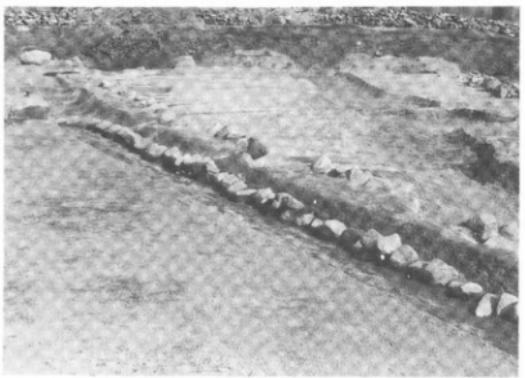


fig. 245 石列全景

15. 雪御所遺跡

SX01

S X 01は平面形態が杓子状を呈する落ち込みで、南側より漸次深くなっていく。南北長13.3m、北側の円形部分の直径3.5mを測る。埋土は暗褐色で、上層はやや粘質、下層は砂質を呈し、いずれも平安時代後半の多量の土師器皿（大・中・小型）に混じて、須恵器（壺・鉢など）、瓦器塊、瓦があり、弥生土器と近世の陶磁器、瓦を若干含む。この遺構の性格については全く言及する資料を有していない。埋土よりみると、遺構埋土そのものの印象を受けるが、上記したように遺物からみて近世終り頃以降の所産であることは動かし得ないものの、平安時代後半の遺物が大部分を占める点は理解し難いものである。何らかの理由で、人為的に遺跡の一部が破壊されたためと推定され、S X 01出土の土師器が遺存度が良好にもかかわらず接合しないことがこの推定の裏付けと言えよう。

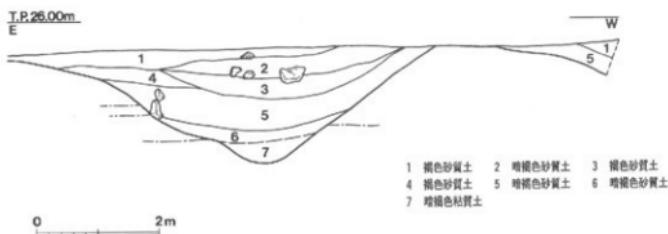


fig. 246 SX01・SX02 断面図



fig. 247 SX01

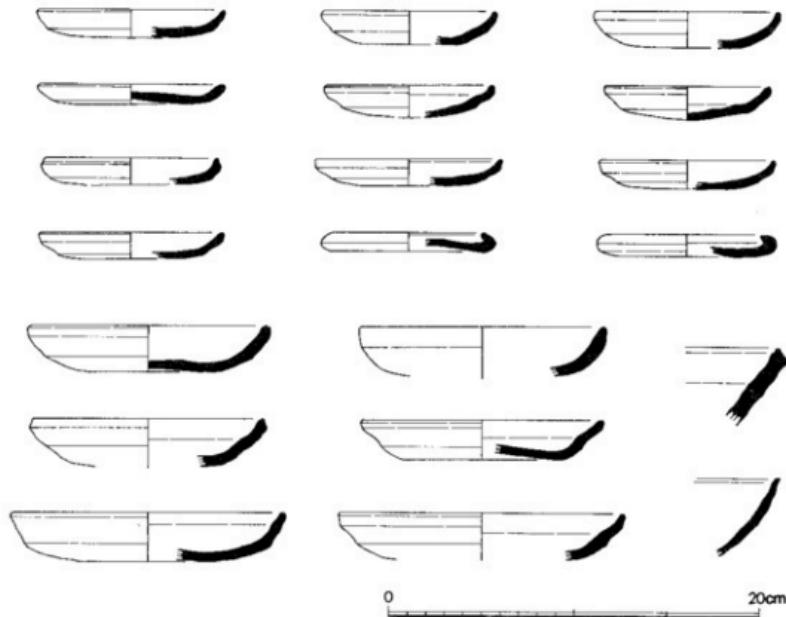


fig. 248 SX01出土土器

3. まとめ

今回の調査で検出した遺構は、いずれも近世以降のもので、雪御所関連の遺構は全く確認できなかった。しかしながら、遺物を多数検出できた成果を見逃すことはできない。検出した遺物は弥生土器（後期）と土師器、須恵器が主たるものである。

今回の調査区では弥生土器の出土量は少なかったが、現在校庭に建てられている仮設プレハブの基礎工事の際盛土直下で多数検出されており、今後の調査の進展で集落址が確認される可能性は極めて高いと言えよう。

一方、須恵器と土師器は雪御所関連の遺物として注目され、福原京全体を探る上での一つの手がかりとなろう。

残念ながら、遺構には恵まれなかった雪御所遺跡の今回の調査ではあったが、遺物の出土状況からみて遺跡の範囲がさらに山麓部へ延びることが推定できる。また、今後の調査に期待するものが多いが、弥生時代後期の遺跡としても天王谷遺跡との関連で重要視できる地点であると言えよう。

みなとがれ 16. 渕川遺跡

1. はじめに

渕川遺跡は旧渕川の右岸の砂堆上に立地する遺跡である。昭和58年12月、マンション建設に伴って調査を実施した結果、古墳時代の須恵器、中世の土器が多数発見され、遺跡の存在が明らかになった。

渕川遺跡の周辺には旧渕川をはさんで、東方200mに弥生時代前・中期の遺跡である楠・荒田町遺跡、北側の段丘上に弥生時代中期の遺跡である東山遺跡がある。また西方の会下山丘陵上に位置する会下山二本松古墳(前方後円墳)、渕川上流右岸の丘陵上に位置する夢野丸山古墳などの前期古墳が所在する。

言うまでもなく、当地域は近代に至って神戸市街地の中心部として発展し急激な開発の中で遺跡も闇がりてしまったと推定される。したがって、先に述べた東山遺跡や二本松古墳などの遺跡はその極一部であり、その多くは地下に埋もれているものと考えられる。

2. 調査の概要

今回のマンション建設予定地内において実施した調査トレンチは、建物基礎掘削部分約450m²について設定した。なお、調査時の排土置地を確保するため、第1次調査として西側の250m²について先行調査をし、残り200m²については西側埋め戻しの後、調査を実施した。

調査地は、地表下1.4mまで盛り土・旧耕土・床土が堆積し、その下層は灰褐色砂質土が厚さ20cm堆積している。砂層からは古墳時代須恵器、中近世土器が出土する。砂層を除去した結果、トレンチ南辺沿いに灰色粘性砂質土を削り込んで河道が検出された。河道内からは中近世の土器が検出された。さらに灰色粘性砂質土を除去した結果、西部では地山である黄褐色粘性砂土ないし淡褐色砂質土を掘り込んだ竪穴住居、柱穴群を検出した。またトレンチ中央部から東部にかけては暗灰色粘性砂質土の古墳時代遺物包含層が被覆し、淡褐色砂質土、淡青灰色シルト層を掘り込んだ遺構が検出された。

検出した遺構は、掘立柱建物4棟、竪穴住居6棟、河道2条である。



fig. 249 調査地位位置図 1:5,000



fig. 250
調査地造構平面図



fig. 251
調査地東半部(西より)

掘立柱建物 1 東西 3 間、南北 2 間の東西棟の建物である。梁間の柱間寸法 1.3m 等間隔、桁行の柱間寸法は、東側と西側で 1.5m、中央間で 2.5m を測る。南側桁行の中央で束柱と考えられる小ピットを検出した。柱掘形は円形の平面プランで直径 0.4m ~ 0.6m、深さ 0.4m を計測する。

掘立柱建物 2 梁間 2 間、桁行 3 間以上の南北棟建物である。梁間の柱間寸法 1.4m 等間隔、桁行の柱間寸法 1.8m 等間隔を計測する。柱掘形は方形プランで一辺 0.5m、深さ 0.35m 前後を計測する。

掘立柱建物 3 梁間 2 間以上、桁行 3 間以上の東西棟建物と推定される。梁間の柱間寸法 2.4m 等間隔、桁行の柱間寸法 1.5m 等間隔を計測する。掘形の平面形は一辺 0.5m ~ 0.6m、深さ 0.3m を計測する。

掘立柱建物 4 梁間 3 間、桁行 3 間の東西棟建物と推定される。梁間の柱間寸法は、北側・南側で 1.6m、中央間で 2.4m を計測する。桁行の柱間寸法は 2.1m 等間隔である。掘形の平面形は方形プランで、一辺 0.7m、深さ 0.35m を計測する。

掘立柱建物 5 トレンチ西部南隅で陥出した梁間 1 間以上、桁行 4 間以上、東西棟建物である。梁間の柱間寸法 2.8m、桁行の柱間寸法は 1.8m を測り、一部中央間で 2.4m を計測する。

柱掘形の平面形は円形プランで直径 0.5m、深さ 0.3m を計測する。

- 竪穴住居1** 中近世の段階で大きく削平を被り、周壁溝と床面の一部を残すにすぎない。竪穴の規模は東西5.0m、南北4.2m以上を計測する。周壁溝は幅0.2m、深さ5cmを計測し、溝内より須恵器片が出土している。床面の北西コーナー一部では焼成をうけた河原石が「コ」字形に組まれて検出され、周間に須恵器壺が原位置を保って出土した。
- 竪穴住居2** トレンチ西部、東側で検出した方形の住居址である。中央部は南北に河道が走り床面まで欠失している。竪穴の規模は東西2.5m、南北5.6m、深さは0.15mを計測する。周壁溝は南東隅を除いて幅15cm前後、深さ5cmで全周する。支柱穴は検出されなかった。周溝内から須恵器、土師器片が出土している。
- 竪穴住居3** 竪穴の西部は流失している。南北5.6m、東西3.2mの規模を有する方形の竪穴住居である。竪穴を東辺の東北コーナー寄りで検出した。床面、竪内からの遺物の出土はない。
- 竪穴住居4** 竪穴住居5が埋没した後に掘り込まれた方形の竪穴住居である。竪穴の規模は東西3.4m、南北2.5m以上を計測する。周壁溝は、幅20cm前後、深さ5~6cmで全周する。
- 出土遺物は床面からの出土ではなく、埋土内より須恵器片が出土している。
- 竪穴住居5** トレンチ東部、北端で検出した方形の竪穴住居である。竪穴の規模は東西6.1m、南北5.0m、深さ20cmを計測する。周壁溝は15cm前後で西壁の中央部を除いて全周している。出土遺物は床面での出土ではなく、埋土内より須恵器片、土師器片が多数出土している。竪の痕跡はない。
- 竪穴住居6** トレンチ東部、南端で検出した方形の竪穴住居である、削平を被り、周壁溝のみを残存させている。周壁溝によって推定される竪穴の規模は、東西5.2m、南北4.8mを計測する。周壁溝は東壁の一部を除いて全周し、東壁の中央部で焼土と灰層が検出され、竪穴と考えられる。支柱穴は竪穴のコーナー寄りで検出された。柱穴の南北の間隔は2.8m、東西の間隔は3.6mを測る。出土遺物は、竪穴南東コーナー部の周溝内で須恵器蓋が出土した。
- 竪穴住居7** トレンチ東部、中央、トレンチ南壁に接して検出した方形の竪穴住居である。東辺を竪穴住居4・5によって切られる。竪穴の規模は東西7.2m、南北7.6m、深さ15cm前後を計測する。周壁溝は幅15cm、深さ4cm前後で東辺の一部を除いて全周する。竪は西辺の西北コーナー寄りで取りついている。竪内からは支脚に用いたと考えられる高環脚部と壺蓋1点が出土した。支柱穴は検出されなかった。

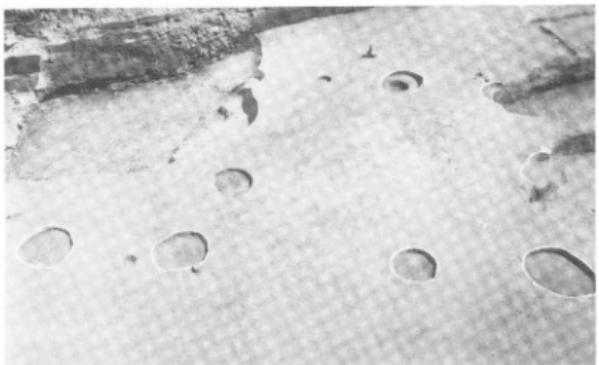


fig. 252
掘立柱建物 1 (北から)



fig. 253
掘立柱建物 2 (南から)

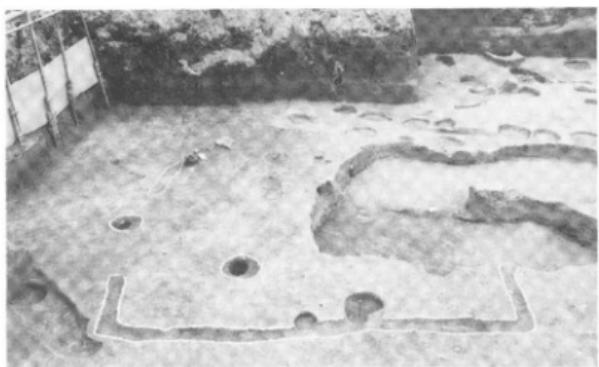


fig. 254
竪穴住居 1 (南から)



fig. 255
竪穴住居 2 (東から)

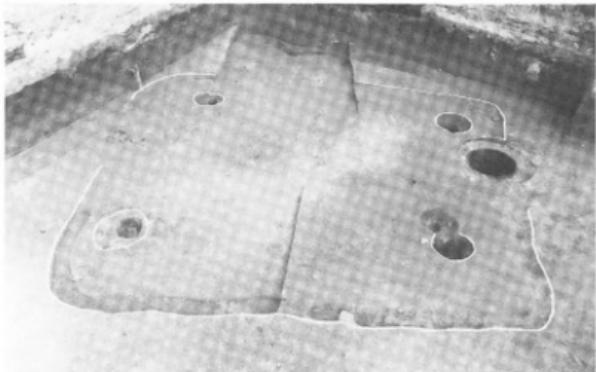


fig. 256
竪穴住居 6 (西から)

3.まとめ

従来、濱川遺跡は昭和58年度の調査結果から自然流路と若干の遺物を出土する土坑、ピットしか検出されず、それらの遺物が属する遺跡はより高い位置にあるものと推定されていた。しかしながら、今回の調査では掘立柱建物5棟と竪穴住居7棟を検出した。これらの発見によって旧濱川右岸の砂堆上には古墳時代の集落が広範囲に存在したことが明確になった。

竪穴住居の時期は、原位置を保つ竪穴住居1の石組遺構に付属して出土した須恵器环と竪穴住居7の竈内出土の須恵器高环、蓋の形態から6世紀の第4四半世紀から7世紀の第1四半世紀と比定できる。

掘立柱建物の時期は掘形内から明確な遺物はないが、柱掘形が竪穴住居2によって切られ、包含層内から6世紀第3四半紀に比定される遺物が出土している点から6世紀中葉前後とすることができるであろう。

これらから掘立柱建物が竪穴住居に先行して用いられたことが明確であり、長田区の神楽遺跡と類似した性格をもつといえる。

くすのき あら たちょう
17. 楠・荒田町遺跡

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、昭和53年度神戸市営高速鉄道（地下鉄）建設に伴う発掘調査でその実態が周知された。その後、兵庫県教育委員会によって、神戸大学医学部附属病院内で数次にわたる調査が実施されている。また、昭和60年度には、楠町六丁目交差点西南でホテル建設に伴う発掘調査を実施した。

これらの発掘調査によって得られた成果は、下記の三点である。一つは神戸市内ではあまり知られていない縄文時代中、後期の遺物が出土すること。二つ目は、弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴が多数存在すること。最後に、平安時代末期の掘立柱建物や漆が存在し、これらが平清盛によって築かれた福原京、あるいは平氏一門の邸宅跡と密接なつながりを持つと考えられることである。

今回の調査は、これら三点の南限を推定するうえで注目されるし、また、いかに補強できるか、期待される点が多くある。



fig. 257 調査地位置図 1:2,500



fig. 258 調査地遠景

2. 調査の概要

調査地区内には木造家屋が建築されていたが、それらによる遺構面の搅乱は、全くといってよいほど無かった。ただ、近世以後に造成されたと考えられる水田により、遺構面がわずかではあるが削平された部分がある。全般的には、遺物包含層も保存され、平均20cm、厚い部分では40cm程度存在した。

遺物包含層は2層に分層でき、上層は、弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、平安～鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、磁器を含む。下層は、弥生土器のみを包含する。

上層に伴う遺構は全く確認できず、古墳時代以降の遺物は調査区北方からの流れ堆積と考えられる。

下層の遺構は、調査地区内に密に分布していた。方形周溝墓2基、貯蔵穴1基、土坑（墓址含む）10基、溝1条、ピット50余個などである。

今日までの発掘調査で主体を占めた遺構は、弥生時代畿内第I～II様式の貯蔵穴であったが、今回の調査地区内では1基のみで、その他の遺構は中期中葉以降に属するものであった。また、縄文時代後期の土坑が1基出土し、注目される。

以下、時代・時期の順にその概要を記す。

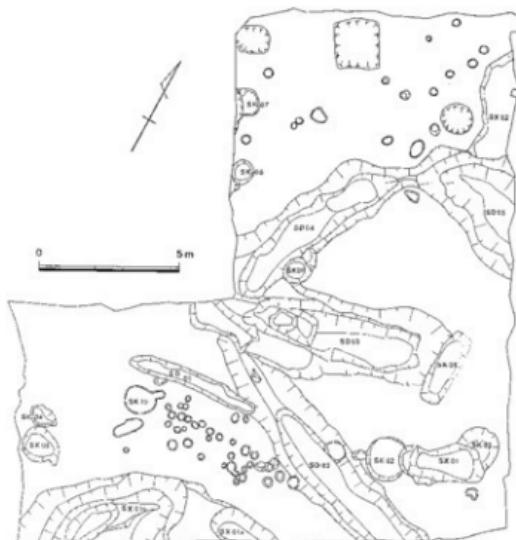


fig. 259
調査地遺構平面図

- SK09** 円形プランの土坑で、SD 04に約半分を切られている。径0.8~0.9m、深さ0.5m、底径0.7mである。底面にはほぼ密着する状態で3個体分の土器片とドングリ類の実の皮が出土した。
- 土器は深鉢2個体と注口土器1個体である。深鉢のうち1個体は小型ではあるが完形に復元し得た。また、注口土器は波状口縁で、凹線と巻貝による肩状圧痕で飾られている。縄文時代後期の宮滝式期に属するものである。
- SK 02** 今回出土した唯一の貯蔵穴で、口径1.5~1.6m、深さ0.7m、底径1.4mである。壁面は、ほぼ垂直に落ち、袋状にはなっていない。埋土の下半には多量の土器片が含まれていた。これらは、周辺から流入したものではなく、貯蔵穴としての機能が失われた後に、そこに廃棄されたものようである。
- 出土した土器は、弥生時代畿内第Ⅰ様式末に属するものである。
- SK 01** 長方形プランの土坑で、長さ約3m、幅1~1.3m、深さ0.4mである。埋土下層に土器・炭化材が多く含まれており、墓壙の可能性は、土層断面の観察からも考えられない。
- 出土した土器は、第Ⅰ様式末と第Ⅱ様式のものを含み、SK 03との切り合い関係とも合致する。
- SK 03** 円形プランをなしていたと考えられるが、SK 01に切られ約半分を失っている。径1.4m、深さ0.2mで壁面は緩い傾斜を有する。
- 出土した土器は、SK 01と同様の時期に属するが、切り合い関係からSK 01より後出するものである。
- SD 03** SD 02・04と連続しているかのように見える溝状遺構である。プラン検出の段階では、それらとの切り合い関係について明らかにできなかったが、遺構検出段階でSD 02・04に切られ、また、SK 08にも切られていることが明らかになった。最大幅2.6m、長さ9.5mである。また、南辺の西隅に存在する平坦部は、検出中に明らかに出来なかったが、土器の出土状況、埋土の状況から推定幅1.3m、長さ3.0mの土坑が切られたものようである。
- 出土遺物は多く、特に底面近くで集中して堆積していた。第Ⅰ~Ⅱ様式のものも含むが、大部分は第Ⅱ様式古段階に属するものである。また、南辺西端の土坑からは、第Ⅰ様式末の土器が集中しており、SD 03に切られていることともにその時期に属するものと考えられる。ただ調査中に遺物の取り上げについて分けることができなかったことから、当概要では一つの遺構として取り上げることを避けた。

方形周溝墓

方形周溝墓はS D02・04・05からなるもので、いずれの溝も中央で深く両端で浅くなり、接する溝に連続する。それぞれの溝の最大幅は2.0m～3.0mで、深い部分は検出面から0.5～0.8mで、断面形はゆるやかなU字形である。全形の約二分の一程度しか調査範囲内に存在しないため、規模については推定であるが、一辺12m×18m程度の長方形と考えられる。

出土土器の大半は周辺から流入した小片で、時期確定の資料にはなり得ないが、S D04・05のそれぞれの隅に据え置かれた壺が出土した。これらはいずれも第IV様式に属するものである。S D02については、土器が据え置かれる場所に三角形の花崗岩が置かれていた。

方形周溝墓に伴う埋蔵施設は、その位置からS K08と推定できるが、S D03との切り合いがつかめず、断ち割ったため詳細を明らかにすることはできなかった。しかし、埋土は流入したものではなく、人為的に埋め戻されたことは、明確であったし、土器もほとんど出土せず、埋葬施設である可能性は高い。

もう一基方形周溝墓と考えられる遺構として、SX01A・Cからなるものがある。検出した部分は、溝状の遺溝が浅くなっているところで、方形周溝墓のコーナーと考えられる。SX01Ca部分は、流入した埋土内に土器小片が多量に入っていたが、SX01Aは、底から検出面まで、多量の石（ほとんどが地山中に含まれる花崗岩）が集積され、その間に細かく割れた土器が多量に含まれていた。土器は壺・高环を中心とし、甕・器台も含まれる。壺は体部に穿孔があり、供献土器と考えられる。これらの土器も第IV様式に属するものである。

以上の他にも土坑・ピット等が存在するが、性格・時期を明確にし得るものはなく、詳細は今後の整理によって明らかにし得ると考えられる。

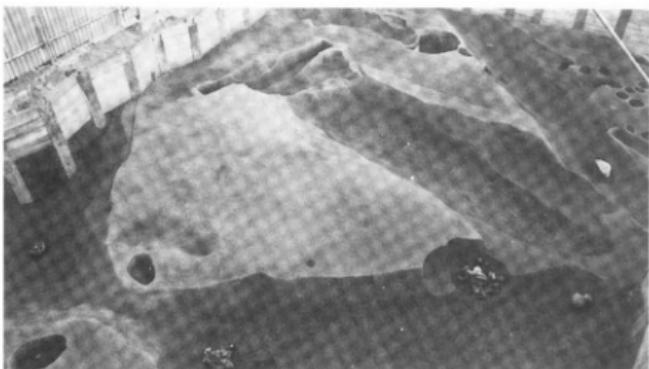


fig. 260
方形周溝墓全景

出土遺物

出土遺物は、土器の他に石器も数多く出土したが、いずれも、当該遺構に伴うものではなく、周辺からの流入によるものであろう。

以下種類と数量のみ記するにとどめたい。石斧 2 点、石庖丁 7 点、石庖丁未製品 1 点、磨り石 1 点、筋砥 1 点、石鐵 11 点、石錐 3 点、石鍤 2 点などである。なお、水洗選別資料からの抽出がまだ終了していないので、今後これらの数は増加する。

筋砥は、S X01A の集石中に含まれていたもので、当遺跡内で玉造りが行われていたかどうかは不明である。ただ S D03 から管下の小片が 1 点のみ出土している。

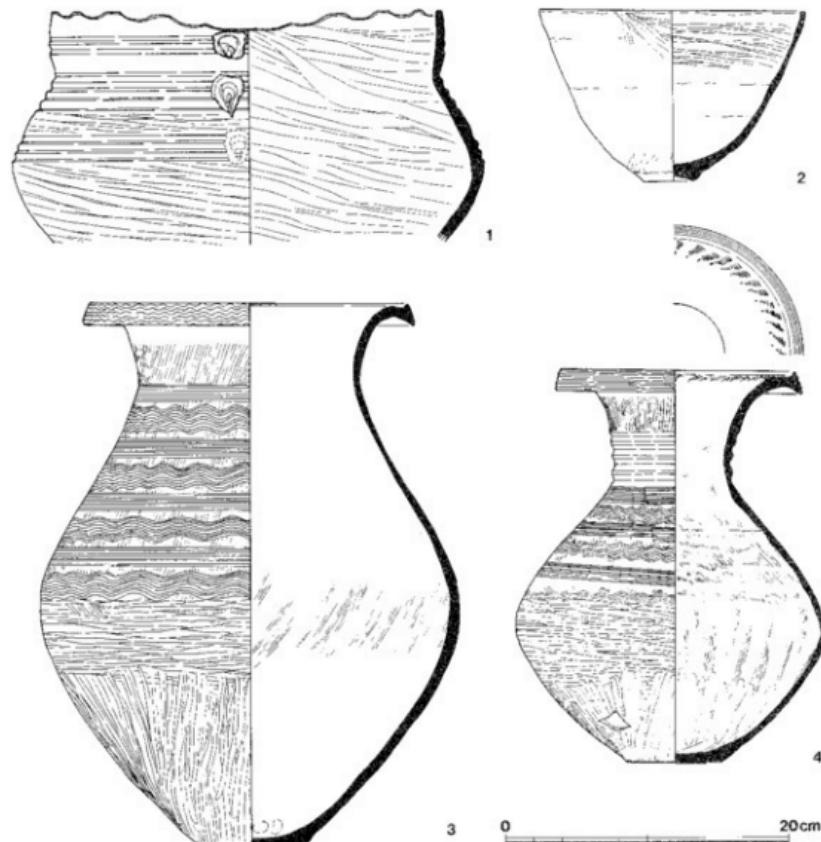
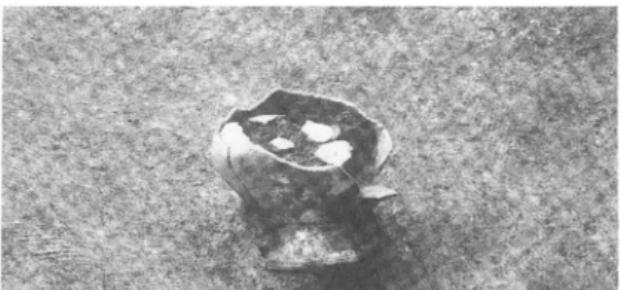


fig. 261 出土土器実測図 1:SK02 2:SD23 3:SK01 4:SD04 5:SK09

fig. 262
SD04土器出土状況



fig. 263
SD05土器出土状況



3.まとめ

今回の調査地は、狭小であったにもかかわらず、多数の遺構・遺物を検出することができた。

先述したように、当遺跡はこれまでの調査で貯蔵穴が出土遺構の大半を占めてきたが、今回は1基のみであった。このことから、貯蔵穴が集中分布する範囲は、地下鉄の通る山手通りよりはさほど南に広がることはなく、また地下鉄関連の調査で明らかになっている西限でもある。

方形周溝墓は、地下鉄関連の調査でも可能性の高いものが1基出土しているが(第Ⅲ様式)、今回のそれは断定し得る最初のものである。造営母体の集落と考えられるものはこれまでの調査では確認されておらず、今回も住居址等は存在しなかった。方形周溝墓と同時期の遺構は、地下鉄関連調査で出土した木棺墓3基のみで、今回の方形周溝墓と合わせいずれも墓址である。また、遺構面上に堆積する包含層中の遺物の大半は第Ⅰ～第Ⅱ様式に属するもので、第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式に属するものはわずかである。したがって、当該地付近は、第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式には墓地化していたと考えられる。

最後に、縄文時代の遺構が今回初めて出土したが、土坑1基のみで、その性格についてふれることは難しい。当遺跡に近接する宇治川南遺跡でも同時期の遺物が出土しており、今後その関連は明らかにされるであろう。

18. 日暮遺跡

1. はじめに

日暮遺跡は神戸市中央区日暮通1丁目周辺に拡がる遺跡である。

この付近は、生田川その他の小河川によって形成された沖積地末端に位置する。また、古代における海岸線が国道2号線付近であると推定されるため、当遺跡は海岸に至近の場所に立地していることが判る。

調査地周辺は、明治初年からの市街地化の進行により、埋蔵文化財の存在は不明確であった。

ところが、当該地に市営住宅建設が予定されたため、昭和61年8月および9月に試掘調査を実施したところ、弥生時代～平安時代の遺物包含層、遺構等が確認された。

そのため、住宅建設が予定されている範囲の約730m²について、調査を実施した。

2. 調査の概要

I 基本層序

調査地の基本層序は以下のとおりである。

- (1) 盛土層
- (2) 耕作土層
- (3) 褐色砂層（鎌倉時代～室町時代の土器を若干含む）
- (4) 褐色砂質土層（平安時代の遺物包含層）
- (5) 暗褐色砂質土層（平安時代の遺構面、古墳時代の遺物包含層）
- (6) 黒色砂質土層（古墳時代の遺構面）
- (7) 黄灰色砂質土層（地山）

現地表面から地山までの深さは約2mである。

基本層序から判るように、当遺跡は、古墳時代と平安時代の2時期にわたる複合遺跡である。



fig. 264
調査位置図 1:5,000

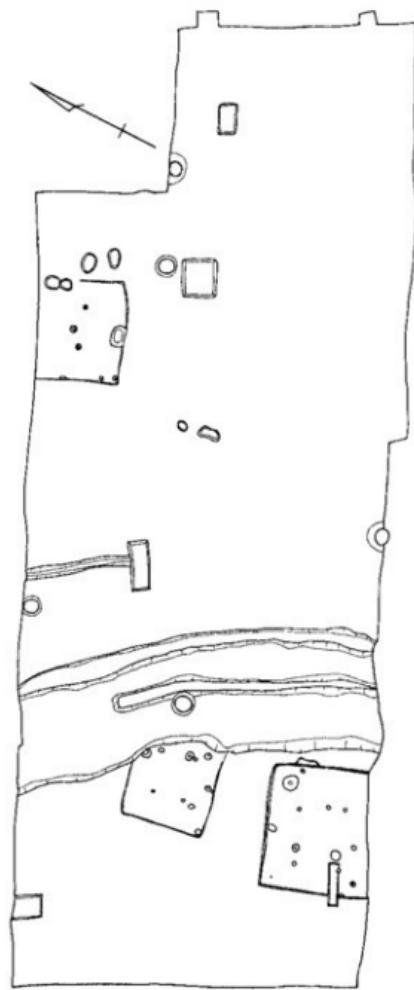


fig. 265
古墳時代 遺構平面図

0 10m

主な遺構

(1) 古墳時代

S B01 穫穴住居 2 棟、竪穴住居状遺構 1 箇所、土坑、ピット等を確認した。南北 4 m 、東西 4 m 以上を測る方形の竪穴住居で、東側を中世の河道 S D01 によって削られている。

建物の柱は、4 本柱で柱間は約 2 m である。南端で、粘土塊が床面に付着した形で検出されている。

遺物は、土師器高环や甕が住居址埋土から大量に発見された。出土状況からみて、住居廃絶後、土器を投棄したものと考えられる。

S B02 東西約 6 m 、南北 5.5 m 以上の方形の竪穴住居で南側が調査範囲外に延びている。

建物の柱は、4 本柱で東西 2.7 m 、南北約 2.1 m の柱間距離がある。また、幅 10 cm 、深さ 5 cm 程度の周壁溝を有する。

S X01 住居址東南端付近の埋土中から土師器高环、甕等がまとまって出土した。東西 5 m 、南北 4 m 以上の方形を呈する遺構である。

南辺に、短径 60 cm 、長径 1 m の土坑を有する。また、ピットが遺構内から確認されているが、柱としては、まとまりがない。

しかし、古墳時代の包含層除去の段階で、この付近から大量に土器が出土しており、その出土状況が S B01 、 02 と近似していることから、住居状の遺構であった可能性が強い。



fig. 266
古墳時代遺構面全景

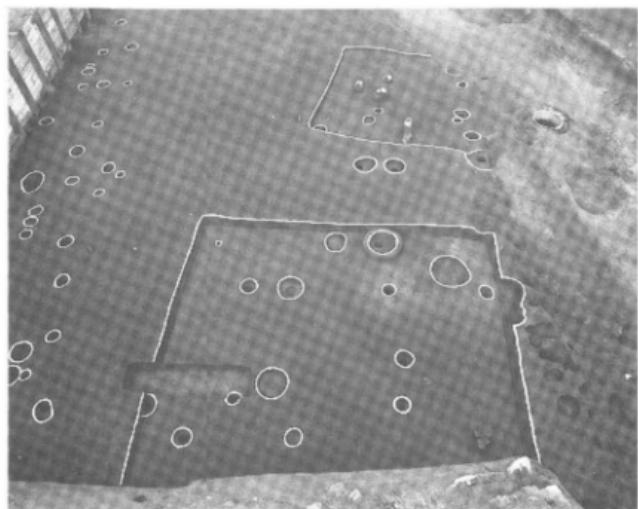


fig. 267 SB01-02

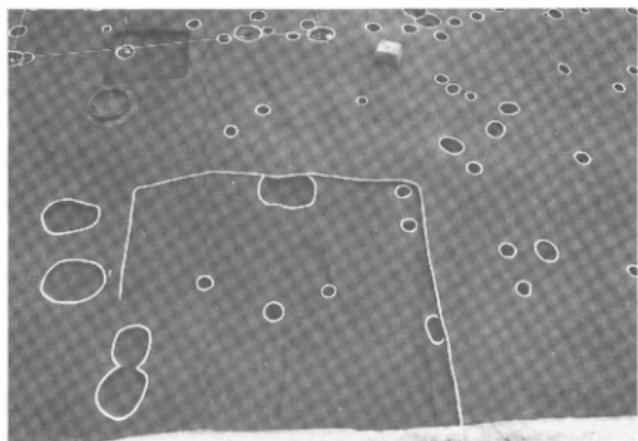


fig. 268 SX01

(2) 平安時代 平安時代の遺構面では、ピット 340個、土坑 4基、溝 8条を確認した。

それらの柱穴の大半は、北西～南東方向の柱列を形成しているが、調査実施後、図上で復元した結果、12棟の建物が確認された。

柱穴内からは、土器、鉄製品、皇朝銭（延喜通宝）が出土している。柱穴の時期は、出土遺物により、平安時代後半と考えられる。



fig. 269
平安～江戸時代遺構平面図

0 10m



fig. 270
平安時代遺構面全景

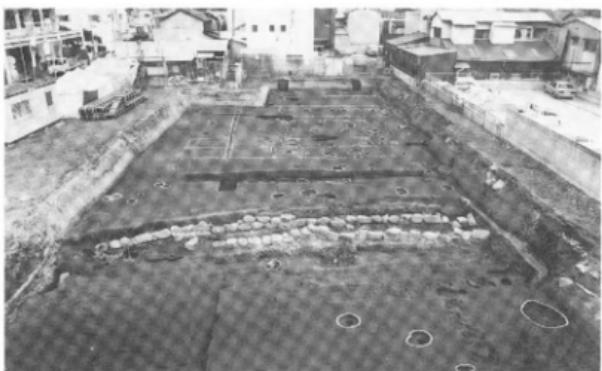


fig. 271
掘立柱建物群(西から)

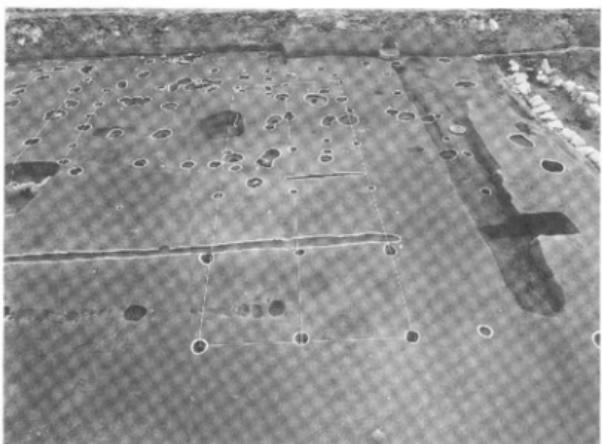


fig. 272
掘立柱建物(北から)

地鎮遺構 調査地内 6 箇所から、掘立柱建物築造に際して埋納したと考えられる土師器甕、土師器壺、皇朝錢等が単独あるいは組み合わさった状態で出土した。

その出土状態は次のとおりである。

i 土師器甕が単独で出土する遺構 2 箇所

1 箇所は、平安時代の遺構面を除去中に発見したため、詳しい出土状況は不明であるが、他の 1 箇所では、浅い掘形を有することが確認された。

ii 土師器と貨幣（皇朝錢）を埋納した遺構 1 箇所

土師器壺 2 枚（1 枚は灯明皿として使用した痕跡を有する。）を重さね合わせ、その下に貨幣（皇朝錢？錢文不明）を数枚納めたもの。

周辺を精査したが、明確な掘形は確認できなかった。

iii 土師器羽釜？と土師器壺及び貨幣（皇朝錢）が組み合わさった遺構

1 箇所

土師器羽釜の底に皇朝錢（寛平大宝 2 枚以上）を置き、土師器壺（灯明皿として使用した痕跡を有する。）をその上に一枚置いたもの。周囲を精査したが、明確な掘形は確認できなかった。上記の遺構同様におそらく、浅い掘形を有するものと考えられる。

iv 柱穴の掘形内に貨幣（皇朝錢）、土師器壺を納める遺構 各 1 箇所

柱穴の掘形内から一枚の皇朝錢が、検出面からマイナス 10cm の位置ではほぼ水平なレベルで、錢文を下にして出土した（錢種は延喜通宝）。また、土師器壺（灯明皿として使用された痕跡を有する。）は、掘形底にほぼ接する形で口縁部を上にして出土した。

これらの遺構、遺物はすべて柱穴の集中する地域に分布しており、建物築造の際に、地鎮の意味あいをもって埋納されたと考えられる。



fig. 273 地鎮遺構 甕出土状況

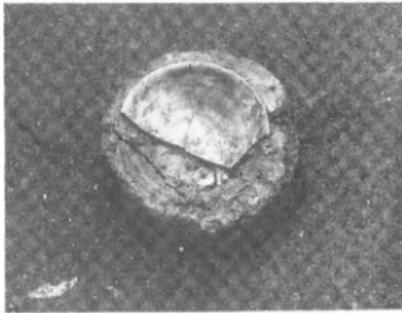


fig. 274 地鎮遺構 土師器皿出土状況

(3) 鎌倉時代～室町時代

S D 01 幅約8m、深さ約1mの河道跡で、埋土の堆積状況により、北から南へ流れている。埋土中より、古墳時代～室町時代の土器、陶磁器、銅錢、石硯等が出土している。

(4) 江戸時代

S D 02 鎌倉時代～室町時代に流れていた河道 S D 01を利用して江戸時代に石組の溝を構築している。埋土中より陶磁器、銅錢、鉄砲玉等が出土している。

Ⅲ 主な遺物 今回の調査では、弥生時代～江戸時代までの大量の土器、陶磁器、金属製品が出土した。

その中でも特に注目すべきものは、銅鑄、貨幣（皇朝銭）である。

(1) 銅鑄 重機による掘削土を除去中、銅鑄を1点採集した。残存長3.5cm、最大幅1.2cm、有茎式で、脇挟を有する。

時期は、古墳時代前半と推定される。同時期のものとしては、神戸市内では、夢野丸山古墳に次ぐ2例目である。

(2) 貨幣 先述の地鎮造構から出土した貨幣は、皇朝十二銭の寛平大宝（890年初鋤）および延喜通宝（907年初鋤）である。

これらは、神戸市内ではこれまで発掘調査によって出土した例はなく貴重な資料といえる。

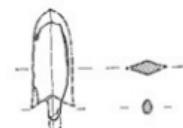


fig. 275 銅鑄 S=1/2



fig. 276 延喜通宝拓影1/1

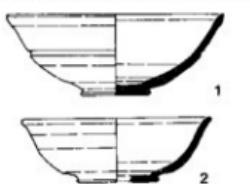


fig. 277 出出土器断面図

3：縁部陶器

1・2・4：須恵器 S=1/4

3.まとめ

今回の調査によって、判明した点を挙げると次のとおりである。

- (1) 神戸市内では明らかでなかった布留式最終段階期とほぼ同時期の造構が確認されたこと。
- (2) 市内では、現在のところ発見例の少ない平安時代後半の掘立柱建物や地鎮造構が発見されたこと。
- (3) 市内で初めて皇朝十二銭の寛平大宝および延喜通宝が発掘調査により出土したこと。

にしもと らのづかこふん
19. 西求女塚古墳

1. はじめに

西求女塚古墳は、六甲山南麓を南東に流れる西郷川の左岸に位置し、その河口から約200m北東の砂堆上に位置している。

西求女塚古墳は、菟原処女をめぐる悲恋伝説に関わる古墳として、古くからその名を知られた古墳である。しかし、明治年間に、個人の別荘として利用されたため、古墳は、かなり荒廃したようであり、遺物が出土したという記録もない。

戦後、古墳の所在する味泥地区の区画整理事業が実施されたため、古墳周辺についても、相当の改変を被ったものと考えられる。さらに、昭和39年には、西求女塚古墳は、都市公園として共用が開始された。その際、公園として利用するため墳丘上に遊具や遊歩道が設けられ、古墳自体は、全長約110mの東面する前方後円墳として整備された。

しかし、近年、墳丘のいたみが著しいため、古墳を整備する計画がもうがり、整備上の資料を得るために、昭和61年3月に国庫補助金を得て、第1次の調査を実施した。

第1次調査では、墳丘自体は削平・攪乱を著しく被り、墳丘構築時の墳丘面を検出できなかったが、後円部中央やや南よりで竪穴式石室の壁体と推定される朱痕のある板石材、そして攪乱内より鏡片、古式土師器片が出土し、西求女塚古墳の築造年代を推定するにたる資料をえることができた。

今回の第2次調査では、前年度検出した竪穴式石室の拡がりと墳丘の形態・規模の推定、段築の有無の確認を目的として、調査を実施した。



fig. 278 調査地
位置図 1:5,000

2. 調査の概要 墳頂部および裾部の残存状態を調査するため、fig.279に示す部分にトレーニチを設定した。なお、トレーニチ名は前年度調査に継続して連番とした。

第1トレーニチ 後円部中心(Po)から仮主軸上の西側の墳丘裾部に設定した長さ8.6m、幅2.0m(面積17.2m²)のトレーニチである。

表土直下0.1m～0.2mで墳丘削平面を検出したが、墳丘構築時の墳丘面は検出できなかった。墳丘部を断ち割りした結果、地表下1.6mで旧地表と考えられる黒色砂質土層を確認した。旧地表の標高は海拔6.6m、旧地表層は厚さ0.2m～0.3mで、その直下に地山である暗黄褐色シルト層がみられる。墳丘盛土は、黒色シルト層、暗黄灰色砂とその両層の互層が交互に盛られ、後円部中心点より西へ33.8m付近から西側で盛土が断層状にみられ、盛土工程の変化が考えられる。盛土内より土器細片が出土した。

第3トレーニチ 後円部仮中心点(Po)から仮主軸に直交する北側の墳丘裾部に設定した長さ5.3m、幅2.0m、面積10.6m²のトレーニチである。

地表下0.15m～0.8mで墳丘削平面となるが、トレーニチ北端、後円部Poから24.5mの地点で北側に墳丘の残存斜面と考えられる面を検出した。葺石は存在していないかった。墳丘盛土は、明褐色砂、黒色シルト層と両層の互層が交互に盛られている。地表下1.4mで旧地表と考えられる黒灰色粘質土を確認した。旧地表の標高は、海拔8.4mである。

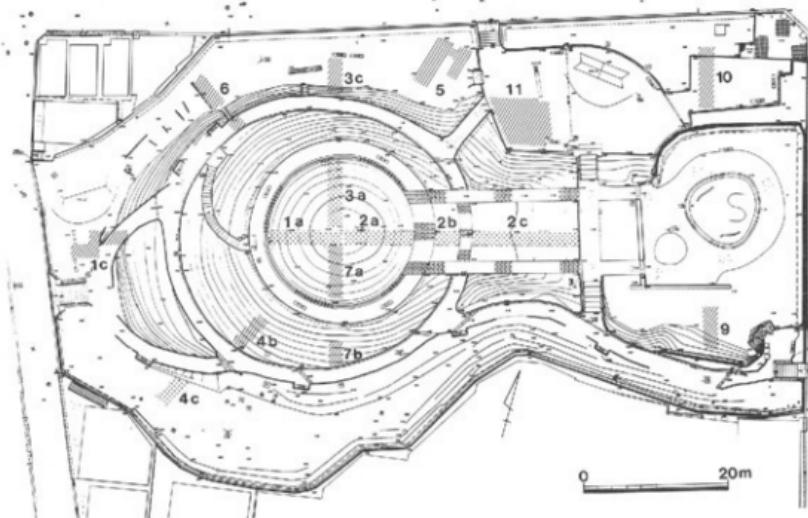


fig. 279 トレーニチ位置図

- 第4トレンチ**
b地区 後円部P oから仮主軸に対して南西へ45° 振ったライン上の墳丘斜面にトレンチを設定した。長さ5.0m、幅2.0mのトレンチで10m²を測る。
- 後円部P oから南西へ19.5m付近で墳丘テラス状の平坦面を検出した。平坦面の幅は、約0.7mで上面に淡黄灰色砂質土と流出した葺石を含む黒色砂質土（明褐色砂ブロックを含む）が堆積している。
- 表土層より第1次調査において墳丘頂部で発見した板石材と同一の朱痕を残す板石材を検出した。
- 第5トレンチ** 後円部P oから仮主軸に対して北東へ60° 振ったライン上の墳丘裾に設定したトレンチである。拡張部も含めて長さ7.0m、幅4.8m、面積約24m²を測る。
- トレンチ北端、後円部P oから29mの地点で、築造当時の葺石が存在する墳丘斜面を検出した。葺石は、10cm～15cm大の花崗岩質の河原石を用いている。葺石の上面には、明淡褐色砂質土と淡褐色砂質土が堆積している。
- 第6トレンチ** 後円部P oから仮主軸に対して北西へ45° 振ったライン上の斜面と墳丘裾に設定したトレンチである。
- 斜面上に長さ5.0m、幅2.0m、墳丘裾に長さ5.5m、幅2.0m、面積は21m²を測る。
- 墳丘斜面のトレンチでは、地表下1.0～1.2mまで攪乱され、墳丘構築時の墳丘面を検出できなかった。
- 墳丘裾部のトレンチでは、地表下0.5mまで攪乱され、墳丘構築時の墳丘面を検出できなかった。

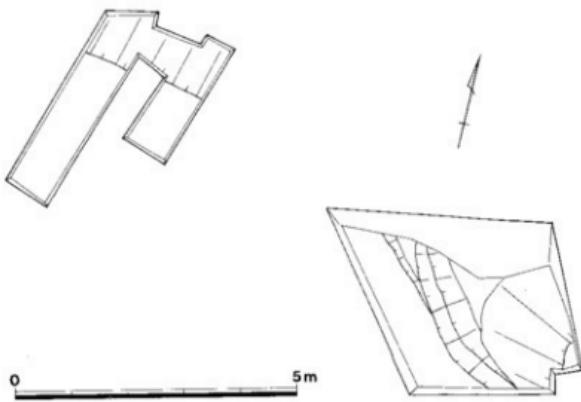


fig. 280
第5トレンチ・
11トレンチ平面図

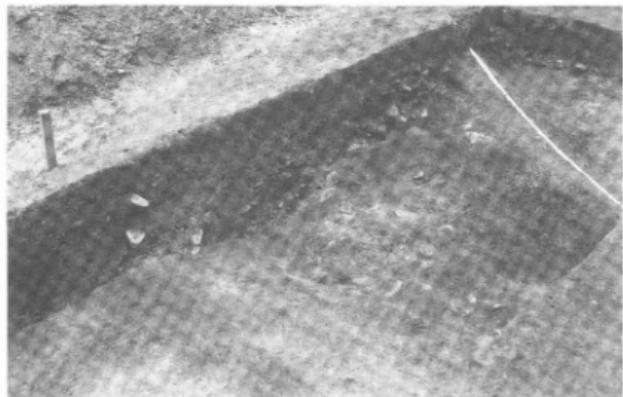


fig. 281
第4トレンチb地区



fig. 282 第5トレンチ

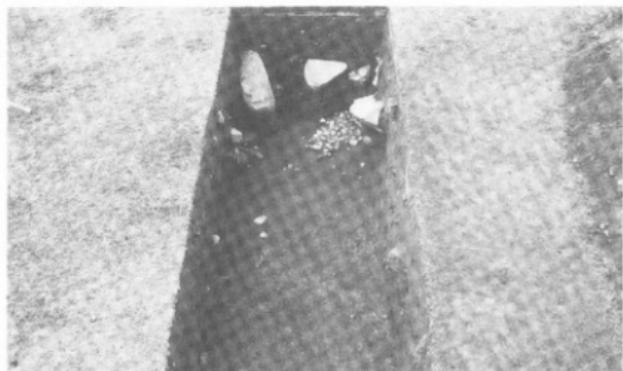
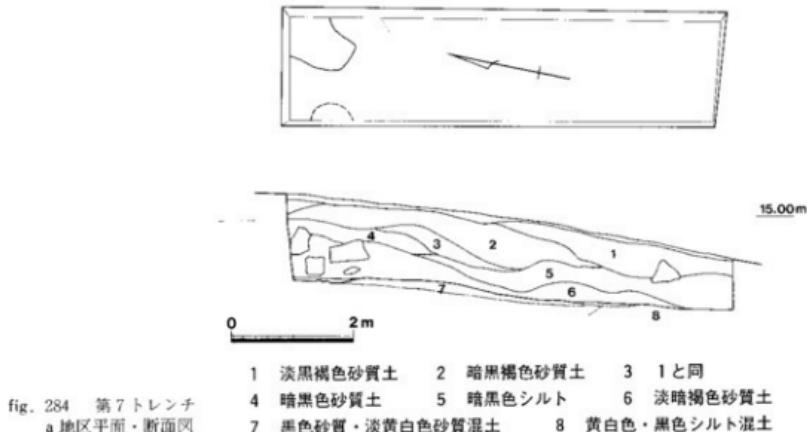


fig. 283
第7トレンチa地区



第7トレンチ 後円部P o から仮主軸に直交する南側のトレンチである。長さ9m、幅2m、面積18m²を測る。

表上下0.8m～1.2mは、公園造成時の盛土である。この盛土下の淡黃白色砂質土を含む黒色砂質の墳丘盛土がひろがるトレンチ北端で上記の墳丘盛土がゆるやかに落ち込み、盛土上面に10cm大の小円礫群が検出された。また、同一レベルの西壁沿いでは、板石群を確認した。

小円礫群と板石群の上層は、黒色砂質土が堆積し、主体部を被覆する盛土の一部と考えられる。

b地区 表下0.2m～0.3mで墳丘盛土となり、テラス面は検出できなかった。

第9トレンチ 後円部P o から仮主軸上東へ50mの地点の南側に、仮主軸に直交して前方部に設けた長さ6.0m、幅2.0m、面積12m²のトレンチである。

地表下0.4m～0.7mで墳丘盛土を検出した。墳丘盛土は、地表下3.2mまで続き、断ち割りの結果、墳丘は東側、前方部前面から順に盛り土がなされたと推定される土層を検出した。

第10トレンチ 後円部P o から仮主軸上東へ50mの地点の前方部北側に設けた長さ9.0m、幅2.0m、面積18m²のトレンチである。地表下1.0mまで近・現代の擾乱層である。擾乱層の下に室町時代～近世の遺物を含む旧耕作土と考えられる灰色砂質土を検出した。その直下には、平安時代前半の塊を含む暗灰褐色砂質土を検出したが、それ以下には、黄白色シルト層などの地山面は地表下1.4mで検出される。

当トレンチでは、古墳の墳丘盛土から検出されず、わずかに近・現代の擾乱層内に盛土が流出したものと思われる。



fig. 285 第11トレンチ

第11トレンチ 墳丘北側のくびれ部と推定される部分に設定したトレンチである。東西7m、南北6.5m、面積約40m²のトレンチである。トレンチ北部から中央部に大規模な現代の擾乱を除去した結果、トレンチ西部では、地表下30cmで中世土器と流出した葺石を含む墳丘流土を検出した。流土を除去した結果、トレンチ西端から2.8mにわたって、平坦面を検出した。平坦面の上面より、丹塗り土器片1点を検出した。

平坦面の東側は、急激に落ち込む。落ち込みの深さは1.5mを測る。落ち込みの下部1mまでは、地山（白色砂と黒色粘土の互層）を掘り込んでいる。

トレンチ東部では、地表下1.2m～2.7mまで現代の擾乱層が堆積していた。擾乱層の真下によくひきしまった砂質土の堆積がみられる。この堆積は、トレンチ東南端でわずかに平坦面をつくり、トレンチ西部で検出した墳丘部をおおいかぶさるように堆積しており、墳丘にとりつくマウンド状の施設の可能性も想定される。

3.まとめ

今回の調査は、西求女塚古墳の周辺部を中心にして、墳丘の外形、規模の確認を目的として調査を行った。その結果、後円部の北側で墳丘構築時の墳丘斜面の一部を検出すると同時に、外部施設として葺石が葺かれていたことを確認した。後円部の西側では、墳丘の削平された状況しか確認できず、後円部の墳丘裾は、公園の外、区画街路にまで及ぶと推定される。前方部については、墳丘の北側では確認できず、くびれ部における墳丘の状況から、前方部は開きが少なく、やや現況より南に、主軸をふる可能性もある。

くびれ部付近で検出したマウンド状の施設も造り出し等の施設に該当する可能性も考えられるが、確証はない。今後の調査によって検証していく必要がある。

20. 郡家遺跡

I. はじめに

郡家遺跡は、その名が示すように旧国「郡衙」(摂津国菟原郡) 推定地として、古くから注目されていた。しかし、発掘調査が行われるようになつたのは比較的新しく、昭和54年度の大蔵地区が最初であった。この調査では、奈良～平安時代にかけての大型の柱掘形を有する掘立柱建物が出上し、郡衙遺構の一部かと考えられ、先の推定地としての根拠がより補強された。その後今日に至るまで当遺跡内での発掘調査は36次を数える。それらの結果によると、当遺跡は、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての複合遺跡で、時期により盛衰はあるものの、ほぼ継続して営まれている。出土遺構は、各時期の建物址、墓址、溝、井戸等で、中でも弥生時代後期末から古墳時代初頭と古墳時代後期の遺構は、濃密な分布状況を示している。

今年度は、都市計画道路予定地内では弓場線内で3か所（城の前地区第18・21・22次）、山手幹線内で2か所（城の前地区第20・23次）、阪急沿線南側内で1ヶ所（上山田第1次）の計6か所の発掘調査を実施した。また、民間の住宅建設に伴って城の前地区第17・19次、下山田第1次の3か所の調査を行った。いずれの地区も花崗岩バイ畳土が厚く堆積する沖積地で、標高29～40mの間に立地する。



fig. 286 調査位置図 1 : 5,000

II. 城の前地区第17次調査

1. 調査経過

調査は、当該敷地のビルディング建設予定地192m²（東西16.0m、南北12.0m）について実施した。

調査地の土層の状況は、北側で地表下35cm、東南部で地表下80cmまで盛土・旧耕土・床土が堆積し、その直下に遺物包含層が検出される。したがって、旧地形は北西から東南に傾斜する斜面であったと推定される。

遺物包含層は、北部では床土直下に黒灰色砂質土（疊合）がみられるが、南部では暗黄灰色砂質土（中世土器含む）がみられ、その下層に黒灰色砂が堆積している。

調査は盛土・旧耕土・床土と擾乱部分を重機械によって除去し、遺構の検出は上記の遺物包含層2層を除去した暗赤褐色砂質土上面において行った。

2. 検出遺構

検出遺構面は、調査地東端で検出した河道が埋没した後に掘込まれた遺構が存在する面（第1次遺構面）と、河道が小規模ながら存在した時期の遺構面（第2次遺構面）がある。第1次遺構面では、竪穴住居埋没後掘込まれた柱穴群と竪穴住居を同一面で検出した。

第1次遺構面

竪穴住居3棟、掘立柱建物柱穴30か所を検出した。

掘立柱建物の柱穴は、灰色砂質土を埋土とするものと黒灰色土を埋土とするものがあり、黒灰色土を埋土とする掘形は比較的大きい。灰色砂質土を埋土とする掘形内から中世土器が出土している。建物としてまとまるものはない。



fig. 287
第1次遺構面全景

SB01

東西4.4m、南北4.2mを測る方形の竪穴住居である。支柱穴は住居址の四隅に接して設けられる。支柱穴は直径60cm、深さ30cm前後を測る。

周壁溝は北壁、東壁の一部で巡っていない。窓は検出されなかった。出土遺物は、原位置を保つものとして、東南コーナーの周溝内で須恵器壺が出土した。

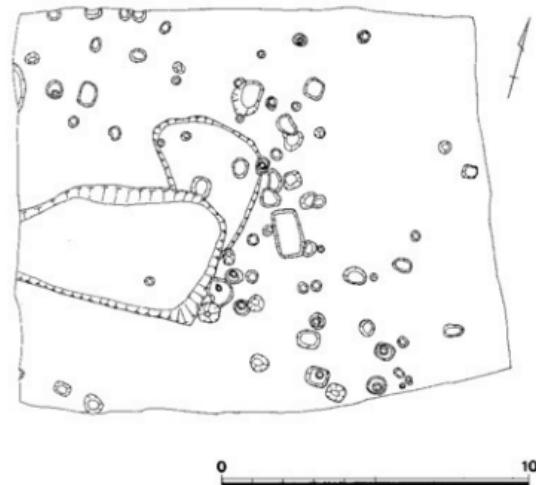


fig. 288

第1遺構面柱穴群平面図

0

10m

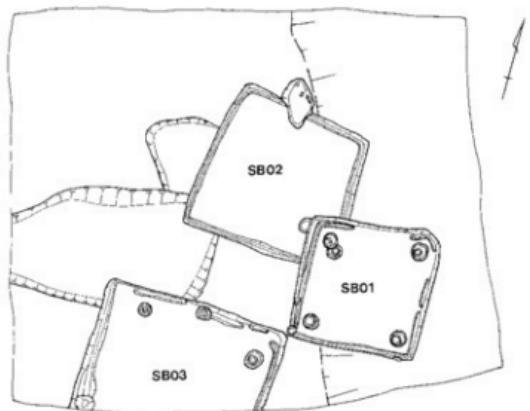


fig. 289

第1遺構面住居址平面図

0

10m

S B02

S B01の北西に接して建てられた、平面がやや台形状の竪穴住居である。南東コーナー部は、竪穴住居1によって一部が欠失している。東西5.1m、南北5.0m、深さ30cm前後を測る。竪穴北辺に竈を取りつけている。竈内からは須恵器环身、土師器甕が出土している。床面からは竪穴の北西部に集中して土器が出土し、北西コーナーでは土師器甕1個体分が出土している。周壁溝内からは北壁に接して砥石完形品が出土している。支柱穴の検出はなく不明である。

S B03

トレンチ南壁に接して検出した東西6.0m、南北4.4m以上の規模を計測する方形の竪穴住居である。壁体は残りの良好な東壁で35cmを測る。竈は西壁につくりつけられ、竈内より須恵器蓋環2個体分が出土した。支柱穴は2か所検出し、柱間隔は4.0mを計測する。

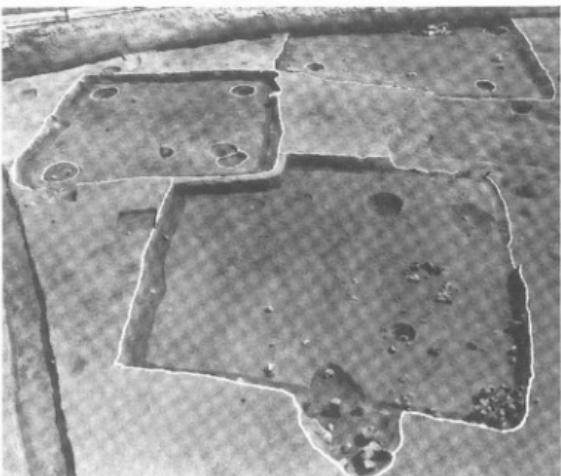


fig. 290 S B01・02・03(北から)

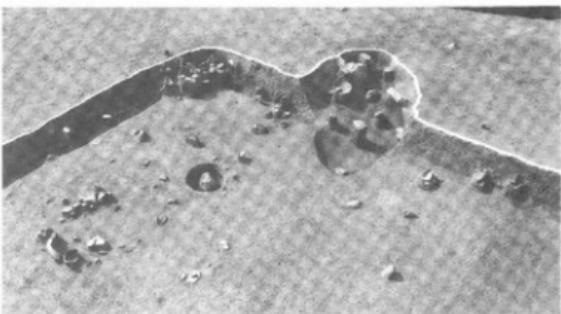


fig. 291
S B02床面土器出土状況

- 第2次遺構面** 窠穴住居3棟、溝状遺構、河道などが検出された。
- SB04** SB02の下層で検出した住居址である。わずかにたちあがりをもつ壁体と周壁溝、床面の一部を検出した。
窠穴の規模は1辺4.8mの規模を有する。
床面から須恵器坏身片が出土している。
- SB05** トレンチ南壁に接して検出した方形の窠穴住居である。東壁と北壁の一部は河道によって欠失している。竈状の土坑が北壁に接してつくりつけられているが、遺物、焼土等は検出されなかった。埋土内より須恵器片、土師器片が出土しているが、床面上での遺物の出土はなかった。
- 河道** トレンチ東壁に接して検出された自然流路である。2時期にわたる土砂の堆積がみられ、上層で古墳時代須恵器、下層で弥生土器の出土がみられる。河底は軽石がみられ、深さ0.6mを測る。
- 溝状遺構** トレンチ南西コーナーで検出した弧状の落ち込みである。幅6.0m、深さ60cmを測る。溝埋土から須恵器片、土師器片が出土している。
- SB06** トレンチ南壁沿いで、溝状遺構によって上面を削られた状態で検出した。隅円方形の窠穴住居で東西4.8m、南北2.4m以上で、壁体の残存状況が良好な東側で深さ40cm前後を測る。周壁溝は北壁沿いにやや内湾して検出された。さらに周壁溝に直交して窠穴中央部からとりつく溝を検出した。この溝の南端部では溝内に礫がすえられる。出土遺物は窠穴東壁に接するピット内から壺形土器が出土した。

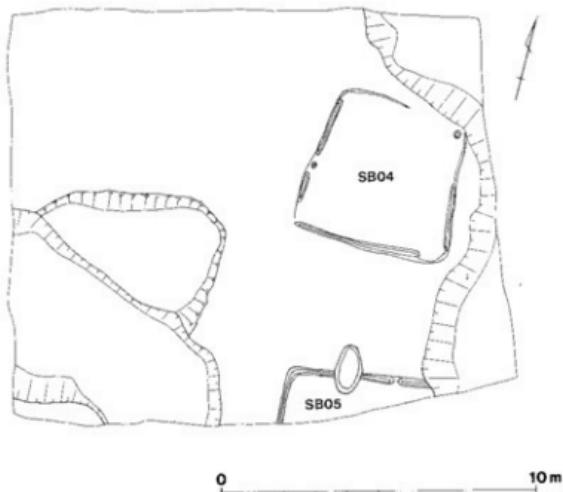


fig. 292
第2遺構面平面図

0 10m

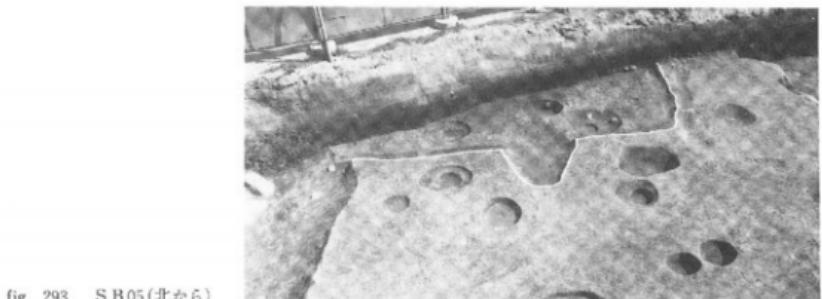


fig. 293 SB05(北から)

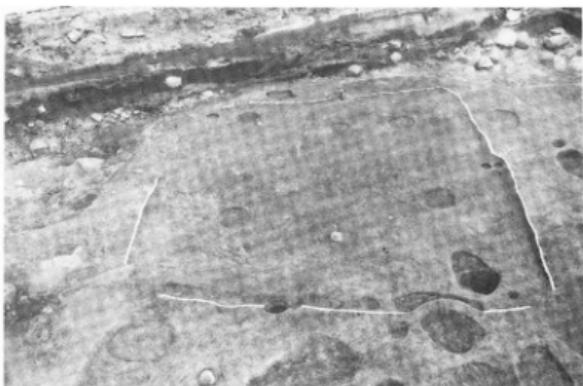


fig. 294 SB04(西から)

3.まとめ

今回の城の前地区第17次調査においては、古墳時代竪穴住居5棟、弥生時代住居1棟、弥生時代から古墳時代にかけての河道1条とその他掘立柱建物に伴う柱穴群を検出した。

河道は旧天神川流路の西端と考えられる。その埋没時期は上層で出土した須恵器の形態から5世紀後半頃と考えられる。

河道が埋没した後に古墳時代集落が形成され始める。その時期は竪穴住居4床面出土の須恵器から5世紀末葉と考えられる。

竪穴住居4の上層で検出した竪穴住居2は、出土須恵器から6世紀前半、竪穴住居2は竈内出土須恵器から5世紀末葉から6世紀初頭、竪穴住居2を切る竪穴住居1は出土遺物より6世紀中葉と考えられる。

以上のように古墳時代竪穴住居の切り合って集中する状況は城の前第7次、第23次と類似したものと考えられる。それらを総合した竪穴住居の時期幅、集落構成の検討は、当地域における古墳時代集落の様相を明確にするうえで重要な意味をもつと考えられる。

III. 城の前地区第18次調査

1. 造 構 調査地区内に防空壕や家屋の基礎等が存在し、造構の残存状況は極めて悪く、住居址様の落ち込み、土坑、ピット、濠状造構などがわずかに確認されたにすぎない。

S X01 住居址様落ち込み（S X01）は、攪乱が著しくその全様は推定するしかないが、一辺4.5~5m の方形竪穴住居と考えられる。周壁の残存高は、0.2m 前後で周壁溝は認められない。主柱は4本柱と考えられるが、確認できるのは2本で確定はできない。

小さな溝状遺構が4条交わる造構（S X02）を調査区南端で検出したが、全く意味不明の平面形を有する遺構である。

S K01 土坑（S K01）は $1.0 \times 0.5\text{m}$ の長方形プランで深さ約0.2m である。埋土中に遺物はほとんど含まれていない。

S D01 濠状遺構（S D01）は、前年度調査でも確認されているもので、その幅は、5.0~5.5m 、深さは2.2m 前後のV字溝である。前年度調査区から直線的に延びて、今年度調査区の西端で北に屈曲しかけている。埋土は、粗砂と粘土が互層をなしており、大半が埋没した時点で石が多量に投棄された形跡が認められた。

ピット ピットは10数か所で確認したが、建物址となるような並びは認められなかった。



fig. 295 調査地全景

2. 遺 物

全般にその出土量は極めて少なく、遺構内出土のそれも、時期決定に耐え得る個体はわずかである。

S X01 S X01からは、須恵器、土師器のほか滑石製白玉が出土した。須恵器は、坏身、坏蓋があるが、胎土・成形・焼成とともに粗悪なものである。その形態から中村編年Ⅱ型式2段階に相当すると考えられる。

滑石製白玉は、遺構内精査時に1点出土したため、埋土を水洗選別したところ14点が確認され、計15点の出土をみた。いずれも粗悪なつくりで、径4~5mm、厚さ1~4mmと一定でなく、孔径は1.5mm前後である。未製品や原材は認められず、当遺構が玉造工房址であった可能性はない。



fig. 297 S D01

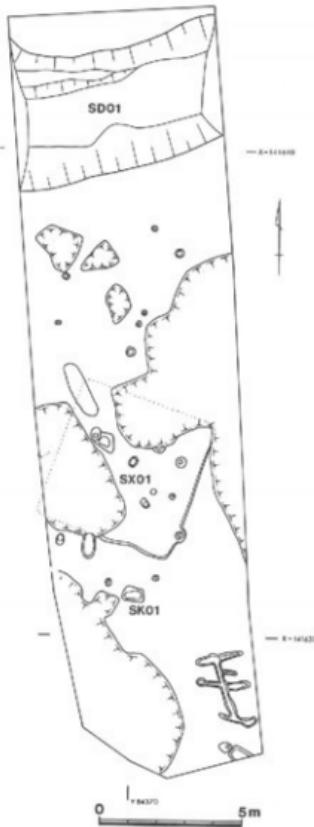


fig. 298 調査地遺構平面図

- S X02** S X02からは、須恵器、土師器が出土しているが、時期決定し得る個体ではなく、古墳時代に属するものであろうことが推定できる程度である。
- S K01** S K01出土遺物も時期決定は困難で、叩き目を有する土師質の土器と須恵器小片がみられるのみである。
- S D01** S D01からは、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器などが出土している。須恵器は東播系の鉢、土師器は羽釜、瓦器は塊、陶器は甕ないしは壺、磁器は白磁碗・皿、青磁碗がみられる。また、瓦器・陶器片を再利用した土製円板（面子）、瓦質で花文の刻印をもつ火舎、土師質の土鍾なども出土している。これらの遺物は、14世紀代に中心をもつと考えられる。

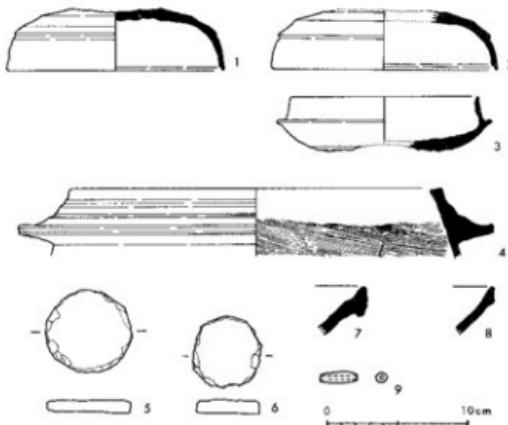


fig. 299 出土遺物実測図
1 : 包含層 2・3 : SX01
4 ~ 9 : SD01

3.まとめ

今回の調査で注目されるのは、滑石製白玉を出土したS X01と、濠状構造のSD01である。

S X01出土の白玉は、15個と住居址としては多量であるが、今まで遺構内埋土を水洗選別することが少なく、量の多少について論じることは難しい。しかし、当遺跡で古墳時代後期の堅穴住居が40棟近く出土している中で、滑石製品を有するものは、城の前地区第4次調査SB03出土の紡錘車と同地区第14次調査SB05出土の勾玉のみで、特殊な住居址であることは間違いないであろう。

SD01は、人工的に掘削された濠であり、その規模・形態から「居館」をとり用むものではないかと推測される。この地域における14世紀代の居館といえば、観応年中（1350～1352年）に乱に敗れ、郡家村に退避したと伝えられる平野備前守忠勝が思い起こされ、その一族と関連する遺構である可能性は高い。

IV. 城の前地区第19次調査

1. 基本層序 第1層・現在の盛土、攪乱、第2層・旧耕土、第3層・床土、第4層・淡茶灰色砂質土(弥生時代～中世の遺物包含層)、第5層・灰黒色砂質土(弥生時代～古墳時代の遺物包含層)と堆積し地山になる。調査区中央部より北側は一段高くなつており、ここでは第5層は見られない。
2. 遺構 遺構はすべて地山面で確認され、竪穴住居(SB01)1棟とピットが数か所検出された。



fig. 300
調査地全景(北から)

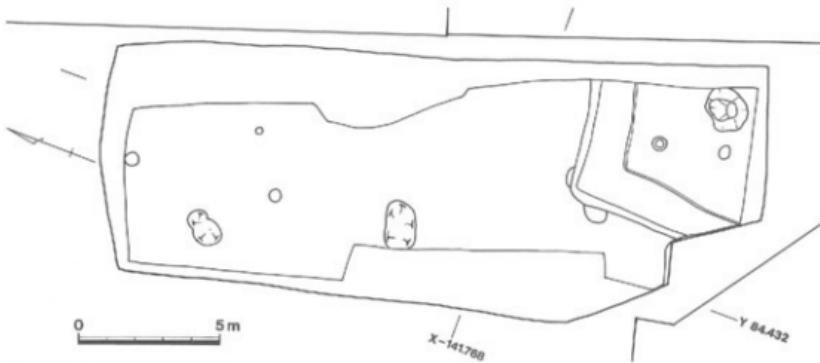


fig. 301 調査地遺構平面図

竪穴住居はそのほとんどが調査区外へ拡がっており、約1/4が確認されたものである。規模は推定一辺8m程度で、方形の住居址と考えられる。

住居址内部には、幅1.0~1.8mで高さ約0.2mで高床部が認められ、ベッド状造構と思われる。これは地山を掘り残したものではなく、盛土によって形成されたものである。柱穴は1ヶ所検出されたのみであるが、位置的にみて4本柱であった可能性が高いものと考えられる。住居址中央部付近で土坑が検出され、埋土に炭が多く混じり、焼土も確認されたことから中央炉と考えられる。

3.まとめ

今回の調査においても竪穴住居が確認され、この周辺が集落の中心地区であることが判明した。今回調査された住居址は、これまでのものと比較すると規模が大きく、ベッド状造構を備えているなど、他の住居址と異なることが注目されるが、調査部分がわずかであり明確にすることはできなかった。

時期に関しては、弥生時代終末から古墳時代初頭の住居址であると考えられ、郡家遺跡の集落構成を考えるうえでも重要なものである。



fig. 302 出土土器実測図
1 : SB01上層 2 : SB01下層
3 ~ 4 : SB01中央土坑



fig. 303 SB01 (西から)

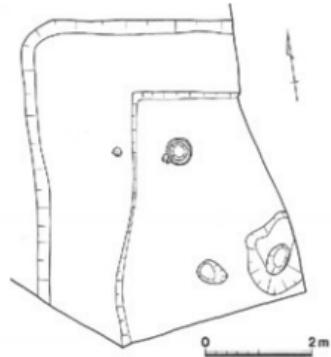


fig. 304 SB01平面図

V. 城の前地区第20次調査

1. 遺構 調査区全域が旧流路であった。その幅は7~8mで、深さは周辺の古墳時代遺構面から2m前後である。埋土の大部分は粗砂であるが、部分的にシルト層がレンズ状に堆積している。粗砂中に遺物が多量に包含され、それらはローリングを受けていないことから、周辺の遺物包含層中から流れ込み、ほとんど流路内での移動はなかったと考えられる。

2. 遺物 上層には古墳時代、下層に弥生時代の遺物が多いといえるが、明確には分け得ない。

古墳時代 古墳時代は須恵器、土師器がみられるが、量は少ない。須恵器には、壺・甕・壺などがみられ、土師器には甕・高壺などがみられる。時期的に同層位出土のものでも幅があり、須恵器についていえば、中村編年I型式3段階からII型式1段階までに属する。

特殊な遺物として、韓式系土器2点が出土している。1点は縄帶文で、1点は細かい平行叩き目である。

弥生時代 弥生時代遺物は、壺・甕・高壺・鉢などの他に靖蓋も含まれる。また、器形不明であるが生駒西麓産の胎土の土器片も出土している。これらは、後期後半に属するもので、一部庄内期に入る可能性のある遺物も含まれる。1点のみではあるが、中期に入る可能性のある無頸壺も存在するが、確定はできない。



fig. 305 調査地全景(北から)



fig. 306 調査地平面図



fig. 307 流路南壁斷面

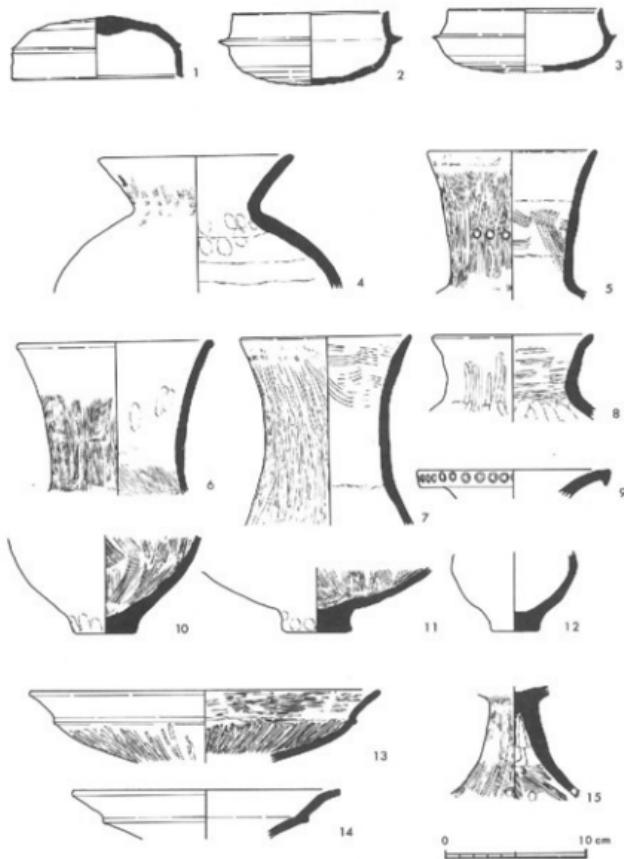


fig. 308
流路內出土土器實測圖

3. まとめ

調査区全域が旧流路であったため、考察できることは少ないが、この流路が形成されたのは弥生時代後期で、その後徐々に埋没し、古墳時代後期には完全にその機能を失ったようである。この流路周辺には、同時期の遺構が存在し、完全に埋没した後には、その上に遺構を築いている（第14次調査分）。

今回の調査で上層からではあるが、弥生時代中期にさかのぼり得る土器が出土したこと、また流路からサヌカイト片が出土したことから、当遺跡の起源がこれまで後期に求められていたが、中期になり得る可能性が出てきた。

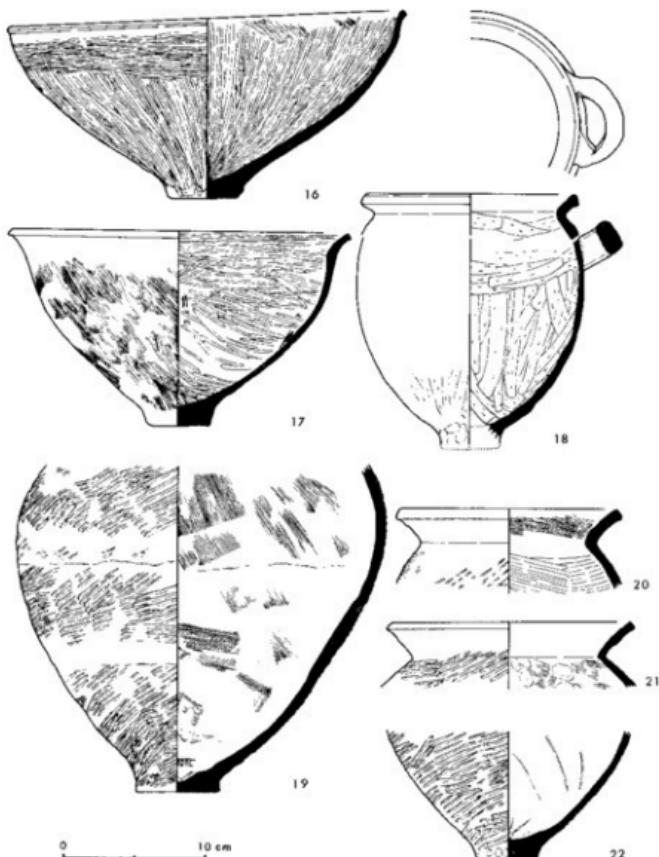


fig. 309
流路内出土土器
実測図

VI. 城の前地区第21次調査

1. 造 構

調査区の北約3分の1は上下2層に造構面が分けられ、上層は鎌倉時代の掘立柱建物が存在した。昭和60年度城の前地区第12次調査SB01は、南北4間、東西1間以上として確認されていたが、今回東側柱列が確認でき、南北4間、東西2間の掘立柱建物であることが判明した。同SB02は、南北2間、東西1間以上として確認されていたが、これもまた東側柱列が確認でき、南北2間、東西2間の掘立柱建物であることが判明した。また、SB01・02の東に新たに東西1間、南北2間の掘立柱建物が確認された。城の前地区第12、15次調査でこの柱列につながる柱穴ではなく、小型の建物であるが、これで完結しているようである。

上記の3棟の掘立柱建物が存在する部分は、その基盤層が淡黄褐色(橙)色のシルト混り粗砂で、いわゆる「真砂土」である。その厚さは10~15cmで、後述の古墳時代造構面上に敷かれているようである。従って、この「真砂土」は整地層と考えられよう。

下層の造構は、竪穴住居、土坑などである。竪穴住居は2棟(SB04・05)出土したが、SB04は城の前地区第12次で、SB05は城の前地区第15次調査でそれぞれの一部が検出されている。

SB04

SB04は、残存状況が悪く、壁面は北辺のみを検出したにすぎないが、柱穴は4本が明確になったのでその規模は復元できる。この復元によると、一辺が4.8~5.0mの方形で、柱間は2.2~2.4mである。周壁溝や中央土坑、竈の痕跡は見られない。住居址北半に床面につく遺物が集中して出土している。



fig. 310 調査地全景

SB05

SB05は、SB04の南約10mで出土した。東西及び北辺と確認できたが、南辺は擾乱により全く失われていた。東西辺は4.0mであるが、北辺は柱列から約2m離れており、対称形とすると約6mで、長方形になる。4本柱で、周壁溝や中央土坑、竈の痕跡は、SB04同様みられない。遺物は、北辺沿いで集中して出土している。

土 坑

土坑は2基(SK01・02)出土している。いずれもSB01より先行する時期のもので、不定形ではあるが、深さは0.4m余と深い。



fig. 311 上層掘立柱建物

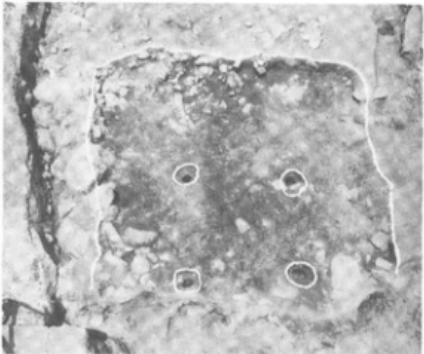


fig. 312 SB 05

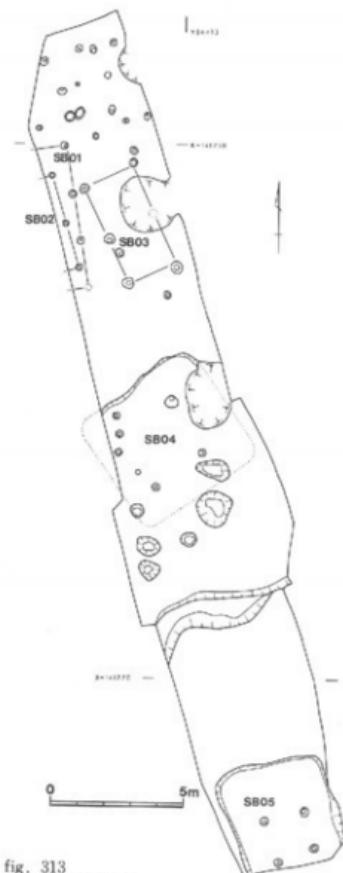


fig. 313
調査地遺構平面図

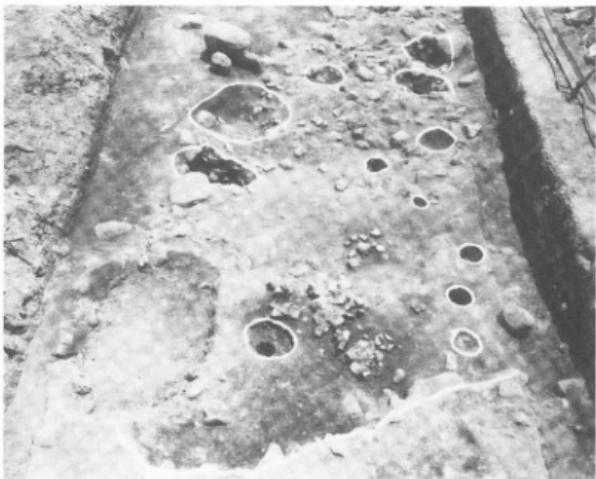


fig. 314 S B 04

fig. 315
S B 05土器出土状況

2. 遺 物

遺物は、極めて少なくそれぞれの遺構の時期が考えられる程度である。

S B 01では、柱穴のひとつから土師器皿片が出土しているのみで、鎌倉時代に属するものであろうことが推定できる程度である。

S B 02・03の柱穴内からは、全く遺物の出土がなく、時期決定はできない。しかし、遺構面からは13～14世紀代の須恵器・瓦器片が出土していることから、やはり鎌倉時代に築造されたものと考えられる。

S B04からは、比較的多くの出土がある。須恵器壺・高壺・壺・甕・土師器甕・甌などである。須恵器は、中村編年Ⅱ型式1段階のものと考えられる。また、鉄製品が1点出土しているが形態は不明である。

S B05では、須恵器壺・甕・甌、土師器甕などが出土している。これらはS B04より古くなると考えられ、中村編年Ⅰ型式4段階にあてられよう。

S K01・02からの遺物は少ないが、須恵器壺で検討する限りでは、S B05と同じ時期と考えられる。

3.まとめ

今回の調査は、面積的に小さく、際立った遺構・遺物の出土はなかった。しかし、先年度検出した鎌倉時代掘立柱建物の規模を限定できる成果があった。また、古墳時代竪穴住居においても、先年度調査で一部確認されていたものの2基の全容と規模が判明したことは大きな成果であった。

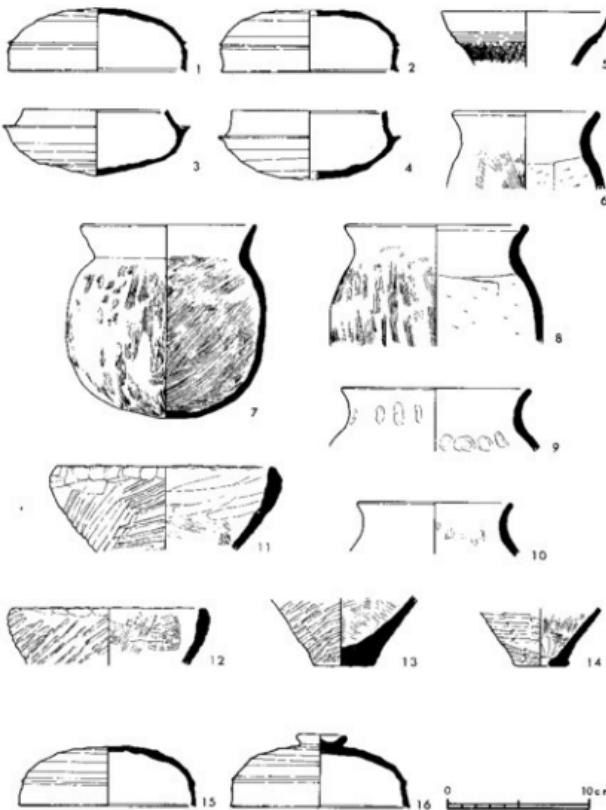


fig. 316
出土土器実測図
1~14: S B04
15~16: S B05

VII. 城の前地区第22次調査

- 1. 造 構** 造構面は2面存在したが、上層からの擾乱や削平が多く、検出は結果的には下層一面でしか行い得なかった。調査区中央に大きな擾乱がある部分を除くと、全体に造構は濃密な分布状況を示す。
- 上 層** 上層からの造構であることを確認し得たのは、掘立柱建物1棟（S B01）、土坑4基（SK10, 11, 12, 13）、溝状造構1条（SD02）などである。
- S B01** S B01は、東西1間（約2.2m）、南北2間（約4.0m）で、柱穴、掘形とともに小型である。
- SK10~13** SK10~13は、いずれも不整形で性格不明である。ただSK13は、位置関係からS B01に関連するものであったかもしれない。
- SD02** SD02は、幅約1m前後、深さ0.2m前後で、ほぼ直角に折れ曲がるが、擾乱で全容は不明である。方位は、先のS B01とほぼ同じくする。
- 下 層** 下層の造構は、竪穴住居1棟（S B02）、掘立柱建物1棟（S B03）、土坑9基（SK01~09）、溝状造構8条（SD01, 03~09）、住居址様落ち込み1基（SX01）などである。
- S B02** S B02は、1辺4.3m前後の方形竪穴住居で、柱間2.0m前後の4本柱である。残存する周壁の高さは0.35m前後と良好で、周壁溝や中央土坑、竪の痕跡は見られない。
- S B03** S B03は、東西1間（約2.8m）、南北2間（3.5~4.0m）の掘立柱建物である。柱痕跡は、22~30cmと太く、掘形も径60cm前後と大きいが、深さは検出面から30~40cmとさほど深くない。
- 土 坑** 土坑は9基出土したが、そのうち用途の判明するものはSK01で、これは、昭和59年度城の前地区第6次調査円形周溝墓1の東端部と考えられる。その他のものは、いずれも形態、埋土から何も判断できない。
- SD01** SD01は、幅1m前後、深さ0.2m前後で直線的に走る。底面は平坦で北から南へレベルは下がるが、水流のあったような痕跡はない。
- SD03~07・09は、幅0.2m前後、深さ0.1~0.2mでほぼ同一方位を示す。全体を知り得るものはないが、SD05はほぼ直角に屈折する部分がある。
- SX01** SX01は、第6次調査時にも不定形の住居址様落ち込みとして検出されている。今回の検出分と考え合わせると、やはり竪穴住居と推定され、一部で周壁溝らしき溝も確認できた。
- 以上の他に、柱穴らしきピットを30余カ所で検出したが、建物址となるような組み合わせは見られない。

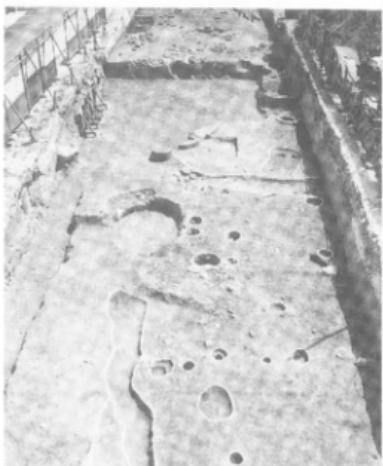


fig. 317 調査地全景(北から)

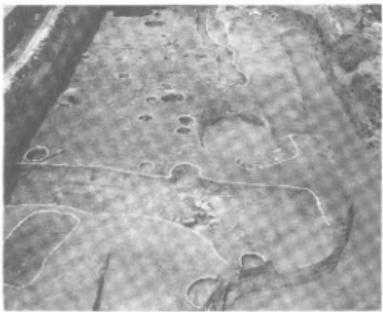


fig. 318 調査地北半部(南から)

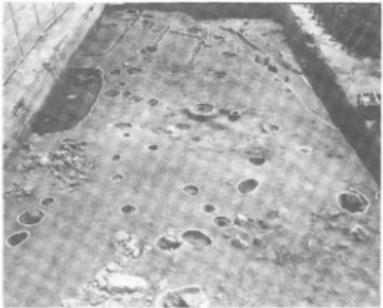


fig. 319 調査地南半部(北から)

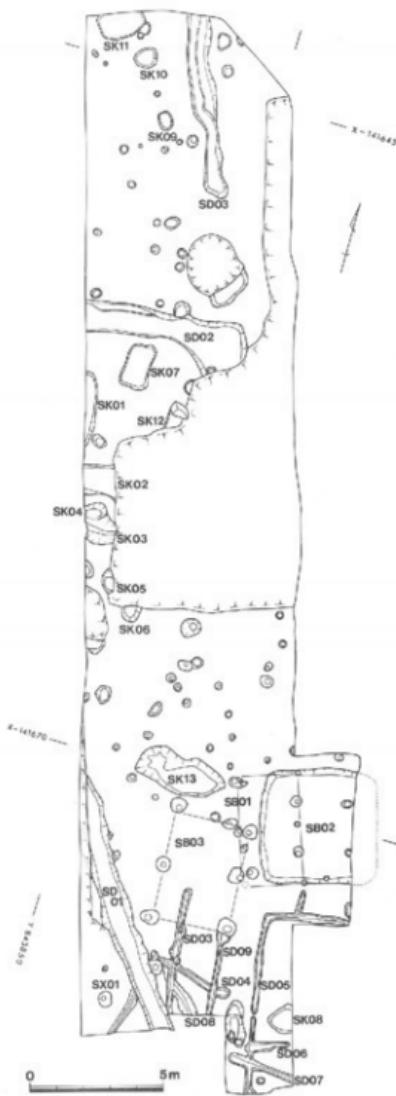


fig. 320 調査地造構平面図

2. 遺 物

上層遺構の出土遺物は、須恵器鉢・壺、土師器壠・皿、青磁碗などがみられるが、極めて少なくそれぞれの遺物の時期比定はできない。しかし、包含層出土遺物も考え合わせると、鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての遺構といえよう。

下層出土の遺物は、上層のそれに比し多く出土している。

S B02 S B02出土土器は、須恵器壺・高壺・壺・甕などと土師器壠などがみられる。完形品は少ないが、その出土量は比較的多い。須恵器の壺・高壺の形態・調整などから中村編年Ⅰ型式5段階に相当すると考えられる。

S B03 S B03出土土器は、柱穴掘形からのもので小片が多く、時期比定は難しいが、S B02よりは後出で、同編年Ⅱ型式Ⅰ段階ごろであろうか。

土 坑 土坑は、いずれも遺物が少なく、かろうじて大まかな時期が判明するものに、SK02・03(古墳時代)、SK04・06(弥生時代～古墳時代)がある。

S D01 S D01からは、須恵器壺・高壺・甕や土師壠・甕、飯蛸壺などが出土している。須恵器の主体を占めるのは、中村編年Ⅰ型式5段階であるが、Ⅱ型式2段階ごろのものまでふくまれ、この溝がその間利用されていたことを示すのかもしれない。飯蛸壺は5個体0.2～1.0mの間隔を置き出土した。釣鐘形の形態をとるものである。

S D03～07、09は、遺物の出土が少なく時期比定は難しいが、S D01の出土遺物の時期幅の内に収まる。

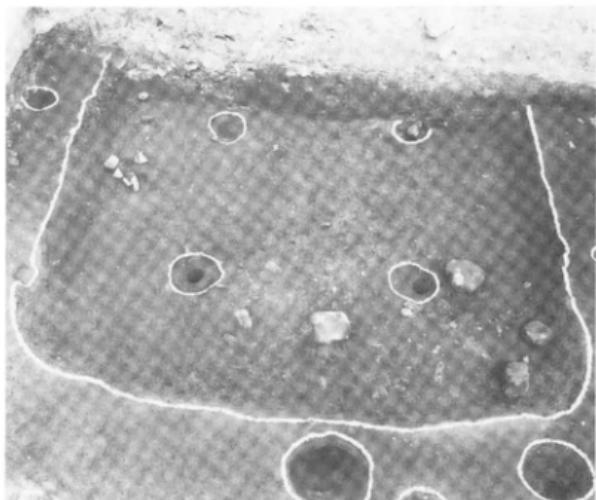


fig. 321 S B02(西から)

S X01

S X01からは、土師器壺・甕・瓶などが出土している。須恵器は出土せず、土師器からみても須恵器出現前の時期と考えられる。

以上の遺物の他に、S D05、S K08付近で多くの土器が集中する部分があり、土器群として取り上げている。須恵器壺・高壺・壺・甕や土師器高壺・壺・甕がみられる。時期的には、S B02と併行すると考えられる。

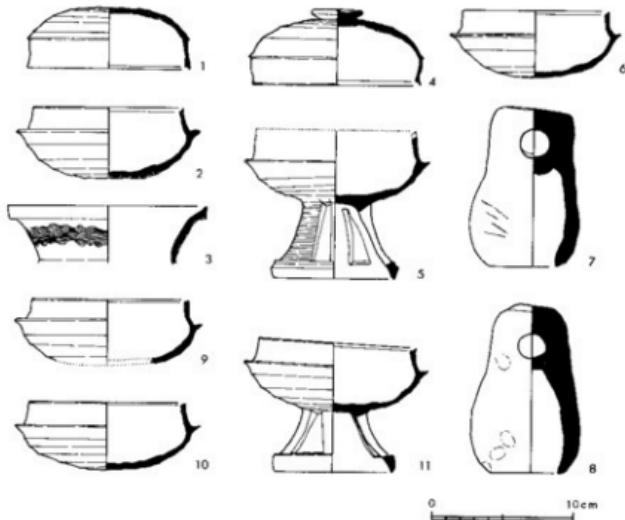


fig. 322
出土土器実測図
1～5 : S B02
6～8 : S B01
9～11 : 土器群

3.まとめ

今回の調査区周辺は、当遺跡内でも最も遺構が集中する地区の一つとして知られていた。その予測どおり、多くの遺構・遺物を検出することができた。

鎌倉～室町時代の遺構は調査区北側の濠状遺構（城の前地区第16・18次調査）と同時期を示し、それらと何らかの関連を有する遺構と考えられる。

古墳時代の遺構で注目されるのは、掘立柱建物（S B03）である。これまで当遺跡内では城の前地区第5・7次調査等で確認され、6世紀中葉以降に掘立柱建物群が出現すると考えられてきたが、それを6世紀初頭にさかのぼらせ、その時期にはおそらく竪穴、掘立柱が併用される過渡的な時期であることが推測される。

飯蛸壺は、これまでにも若干の出土はあったが、同一遺構内から5個まとめて出土したことは、製塙土器の出土とともに海浜の集落としての性格を表わすものであろう。しかし、土錘も含めてまだその出土量は少なく、漁撈活動が活発に行われていたとはいいがたい。

VIII. 城の前地区第23次調査

- 1. 遺構** 遺構面の大部分は、近世以降の水田造成時に削平されており、調査区西端のそれも北半のみで2層の遺構面を確認することができた。
- 上層** 上層の遺構面で確認できたのは、2棟の掘立柱建物（S B06・07）である。
- S B06** S B06は、東西4間（5.0m）、南北3間（4.4m）であるが、南西隅の柱穴は確認できなかつた。
- S B07** S B07は、柱穴の切り合い関係からS B06に後出するものであることが確認できた。東西2間（4.2m）、南北1間以上（1.5m以上）である。
- S X01** 調査区東端に近い部分で、上記2棟の建物址と同時期と考えられる井戸状の土坑1基（S X01）を検出した。径1.8~2.0mの円形で深さは1.4mである。検出面から0.4~0.8mの部分は、くずれ込んだような状態で、花崗岩の割り石や自然石が堆積し、その下で壁面は段をつくるように一辺1.1mの隅円方形になる。底面から石の堆積までの間、すなわち段になった部分より下は、粗砂とシルトが互層になり、わずかに滲水したような状況の中で徐々に埋没していったようである。この遺構は、昭和58年度城の前地区第4次調査の井戸（S E01）に、積石が中程にあり、それ以下でプランを縮小する点が酷似する。このS X01の堆積した石も周囲の壁に積まれていた可能性は高いし、またこの遺構が埋没河川上に構築されていることを考え合わせれば、井戸と判断してよいだろう。

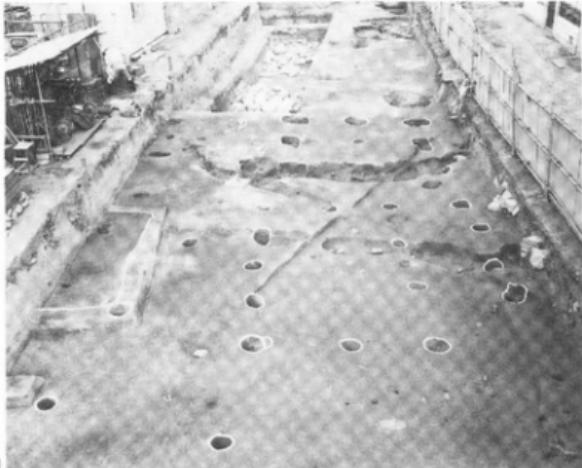


fig. 323 調査地全景(西から)



fig. 324 S X 01

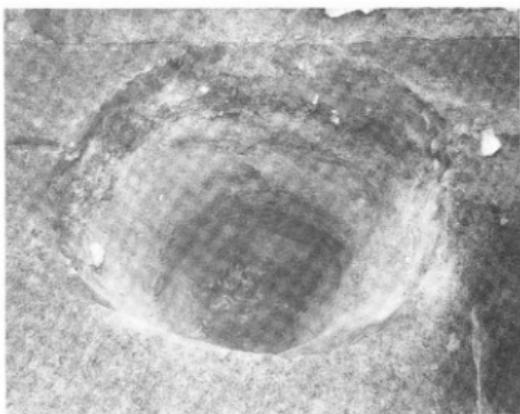


fig. 325 同上

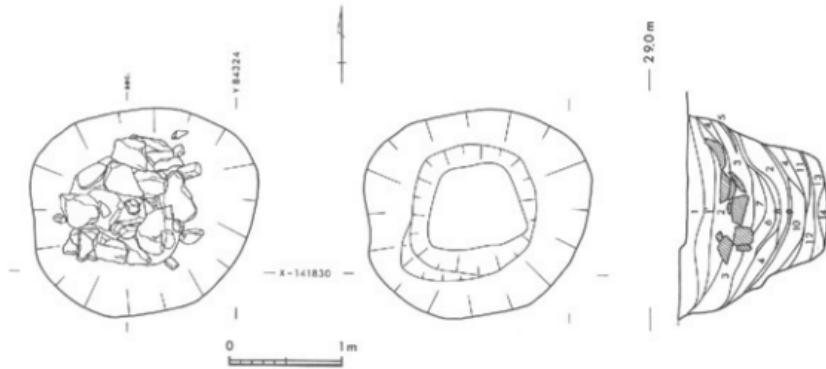


fig. 326 S X 01平面・断面图

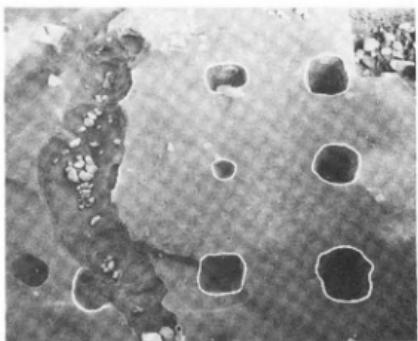


fig. 327 SB 05(南から)

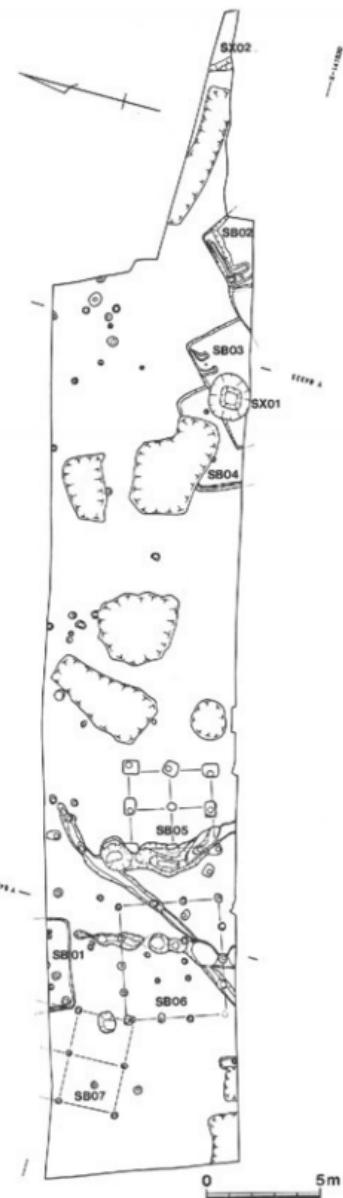


fig. 328 SB 06(北から)



fig. 329 SB 02・03・04(西から)

fig. 330 (右) 調査地造構平面図



- 下層** 下層の遺構としては、掘立柱建物1棟（SB05）、竪穴住居4棟（SB01～04）、ピット20余か所などである。
- SB05** SB05は、東西2間（3.5m）、南北2間（3.5m）で、中央に東柱を持つ。柱穴掘形は長方形で、長辺0.7～0.8m、短辺0.5～0.6m程度、深さ0.6m前後で柱痕跡の径は0.25～0.3mと太い。柱穴の底面に、 $0.3 \times 0.35 \times 0.15$ mの扁平な花崗岩の据置かれているものが1ヶ所存在した。東柱は、径0.35mのU形で、深さは0.23mと小型である。西柱列は、3本とも一時的に激しく流れで埋没した小河川によって切られていた。
- SB01** SB01は、一辺4.0mの方形竪穴住居と考えられるが、幅約1m程度しか調査区に入っていないため推定である。西辺のみに周壁溝が設けられている。床面から約5cm程度上で一面に薄い灰層が広がっていたが、住居址上部が焼失したような様子はなかった。
- SB02・03** SB04は、一辺4.4m、SB03は5.2m、SB02は4.7m以上で、それぞれ
-04 方形の竪穴住居と推定される。これらいずれの住居址も近世以降の水田造成で、幾分削平されており、残存する深さは0.2～0.3mと浅い。周壁溝はSB04の西辺で確認できたが、SB03・02では認められない。
- SB02・03の北辺では、造りつけの窓を検出した。
- SB03は、北辺の中央より東に偏した位置で、焚口の内法0.45m 奥行0.65mで、焚口より0.4m内側中央に土器底部を支えるための石が埋め込まれていた。煙道は一般的に、造りつけられた壁面から真直に出されるが、この場合、壁面に平行して走り、北東角に導かれている。その煙道の内法は、0.1～0.15mで、長さは0.8mである。
- SB02の窓も、SB03同様の形態を示すが、規模は大きく、焚口の内法0.25m、奥行1.1m、煙道の内法0.2～0.3m、長さ2.1mである。焚口内部には、やはり土器を支えるための石が埋め込まれていた。これら窓の壁体は、細砂混シルトで築かれており、支脚となる石より焚口側は、底面、壁面とも火熱により赤化していた。
- SB02～04は、04、03、02の順で建て替えられている。
- ピット** 20余か所のピットは、建物址になるような配列はみられず散漫である。
- 河川** 今回の調査区は、遺構面全体が埋没河川上であり、遺構の少ない部分でその底を確かめるべく幅約4m、長さ20mにわたって断ち割りを行った。その結果、遺構面下1.2～1.5mで河川底と考えられる大形の礫群が検出された。河川内埋積土中には遺物は全く含まれず、当地域に集落が形成される以前、すなはち弥生時代中期以前に機能していた河川と考えられる。

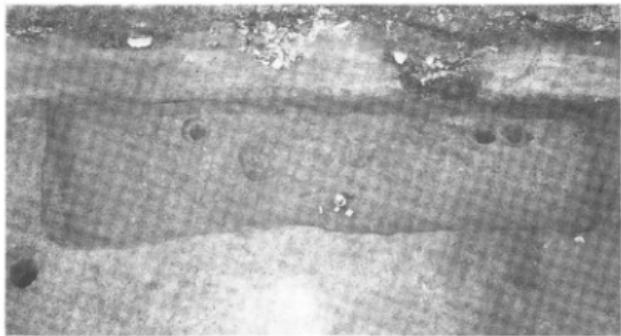


fig. 331 S B 01



fig. 332 S B 04



fig. 333
S B 02 窯と煙道

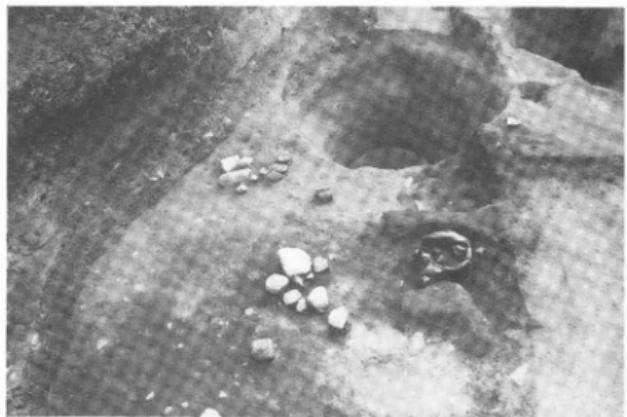


fig. 334 S B 03



fig. 335 S B 03窟内
土器出土状况

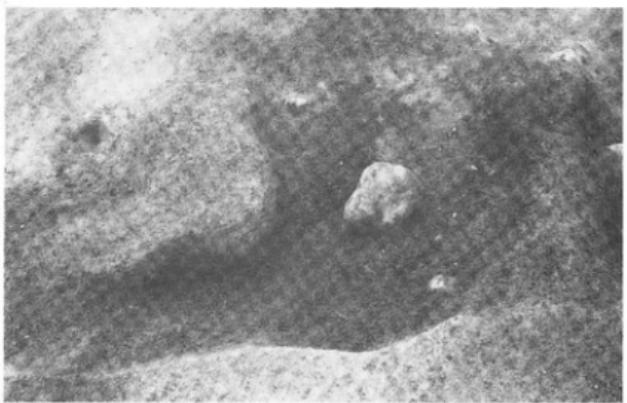


fig. 336 同完掘状况

2. 遺 物 造構の量に比べ遺物は、わずかであった。まず、上層造構に伴うと考えられるものに須恵器、土師器、瓦器が存在する。

S B06・70 S B06・07の柱穴からは遺物の出土がなく、時期確定はできないが、造構而出土遺物から鎌倉～室町時代にかけてのものと考えられる。

S X01 S X01内からは、上層で須恵器、土師器、瓦器の小片、下層から土師器皿完形品が2点出土している。この土師器皿からおそらく14世紀代に属するものと考えられる。

下層造構についても、上層造構と同様、出土遺物は少ない。

S B05 S B05では各柱穴から出土遺物はあるものの、小片のため時期の確定はできない。しかし、その中に須恵器はふくまれず、西側柱列を切る小河川には庄内式期から古墳時代後期の遺物が含まれることを合わせ考えると、このS B05は弥生時代後期から庄内式期のものと判断できる。ただ、柱痕跡・掘形が大型であること、礎盤（石）が大きく立派であることから疑問も残る。

S B01 S B01からは、須恵器・土師器が若干出土している。床面に接して出土した須恵器壺・高杯からみると5世紀末葉から6世紀初頭のものと考えられる。

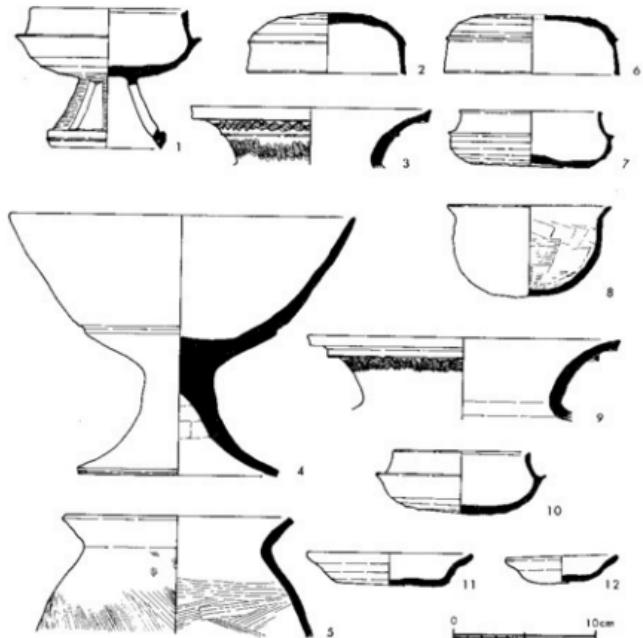
S B02～04 S B02～04は、たがいに切り合い、S B04・03・02の順で新しくなっている。しかし、出土した須恵器壺の形態で判断すると、S B03・04・02の順で新しくなっている。このことについては、S B03・04の須恵器は胎土・調整から別の産地であることと、切り合い関係の判断が誤っていたとして、S B04の東壁を真直にのばすと、S B03出土の壺もS B04の内側に入ることから、この切り合い関係に誤りはないと考えられる。

S B03の竈内の支脚（石）上に土師器甕がくずれおちていた。その甕の三方には、須恵器壺・甕片が接して出土している。おそらく、竈に須恵器を「ツメ」として甕がかけられていたものが、そのままくずれ落ちたと考えられる。

S B02の竈内からは、土師器の器台と考えられる破片10数点が出土している。これらの破片は、接合できるものが少なく、全体の形は不明であるが、長方形の透し孔をあけ、突線を意識した凹線をめぐらしている。胎土や調整からは、須恵器の焼成不良のものと考え難く、須恵器器台の模倣と考えられる。

これらS B02・03・04は、切り合い関係、出土遺物からみて、それぞれ時期差はあるものの、すべて5世紀末葉から6世紀初頭に築かれたものであろう。

fig. 337
出土上器実測図
1~3 : SB01
4~5 : SB02
6~9 : SB03
10 : SB04
11~12 : SX01



3.まとめ

上層造構の鎌倉～室町時代にかけての造構は、これまでの城の前地区の各調査でも検出されているが、その分布は散漫で、集落の中心地となるような地域さえ明確にし得ていない。その中で井戸と考えられるSX01が出土したことは、この付近に集落の一つのまとまりの存在を予測させる。しかし、このSX01と同時存在すると考えられる建物址はSB06・07の2棟で、しかもこれらは前後関係が存在するので、付近にはまだいくつかの建物址が存在すると考えられる。

下層造構では、SB02・03の竈が注目される。この竈と類似するものは、京都府北部で出土する青野型住居址と呼称されるものであるが、時期は7世紀代に下がる。煙道を住居址内に設けることに意味があるようで、「オンドル」的効果を有するのかもしれない。仮にそうであるとすれば、これを築いた人々の出自にもかかわる問題であり、今後の課題としたい。

なお、SB02の竈焚口内に堆積していた炭灰層を水洗選別したところ、魚類・小動物の骨や穀類が見出された。今後の鑑定によれば、古墳時代食料の一端が明らかになるものと思われる。

IX. 下山田地区第1次調査

1. 調査経過

当地にマンション新築工事の計画が興り、昭和61年2月10日に試掘調査を行った。結果、現地表下約1.5mで須恵器、土師器を含む包含層及び柱掘形の一部が検出されたため、施主と協議を行い、マンション建築により遺跡が破壊される部分約190m²について全面調査を実施することとなった。

2. 遺構と遺物

調査範囲が狭小なため、まとまった遺構は少なかったが、掘立柱建物3棟の他、柱穴、ピット等が検出された。

SB01

調査地南西部で検出されたもので、東西長は確定できなかった。桁行3間（乃至2間以上、4.92m）×梁行3間（4.16m）の規模を有する。柱掘形内より6世紀後半と思われる須恵器片が出土した。主軸はN16°Eを測る。

SB02

SB01の北でこれにほぼ平行して建てられた掘立柱建物で南東隅のみ検出された。前者同様、東西棟とすれば、桁行2間（乃至2間以上、2.84m）×梁行1間以上（1.44m）となる。出土遺物はなかった。主軸はN13°30'Eを測る。

SB03

SB01の東で北の柱筋をそれにそろえて建てられた東西棟の建物址である。桁行1間以上（2.32m）×梁行2間（2.44m）を測る。前2者の柱掘形が0.8m×0.6m前後の隅円長方形であるに対し、これは径0.4m～0.5m前後の円形又は隅円長方形を呈する。出土遺物はなかった。主軸はN17°Eを指す。

遺物包含層からは、柱掘形内出土土器とほぼ同時期と思われる須恵器の他、10世紀代の縁釉陶器、灰釉陶器等が出土している。

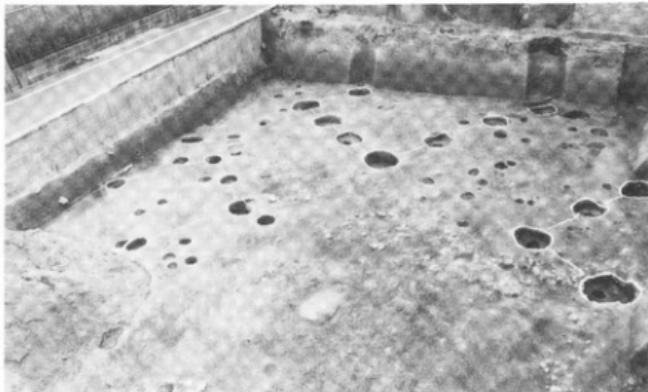


fig. 338
調査地全景（東から）



fig. 339 調査地遺構平面図

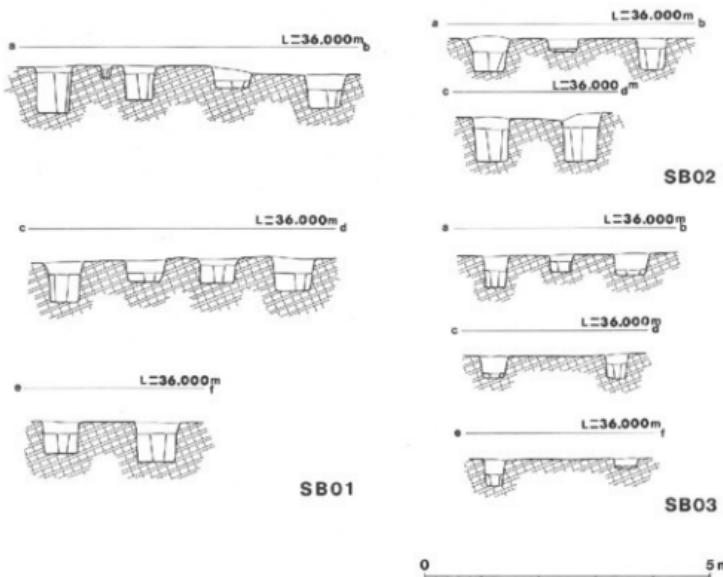
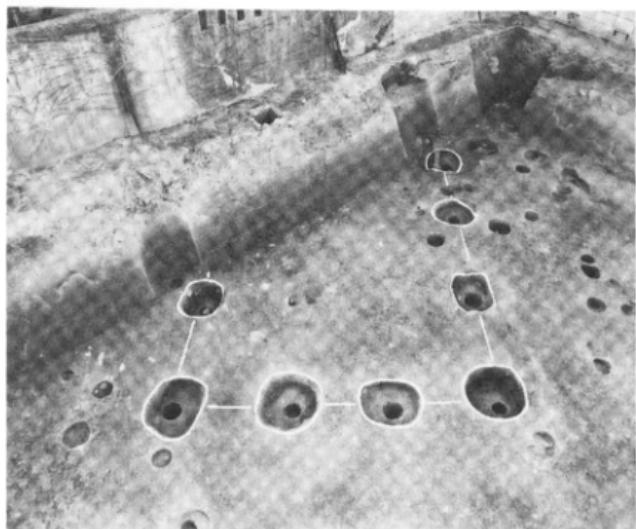


fig. 340 掘立柱建物柱穴断面図

fig. 341
SB01(東から)

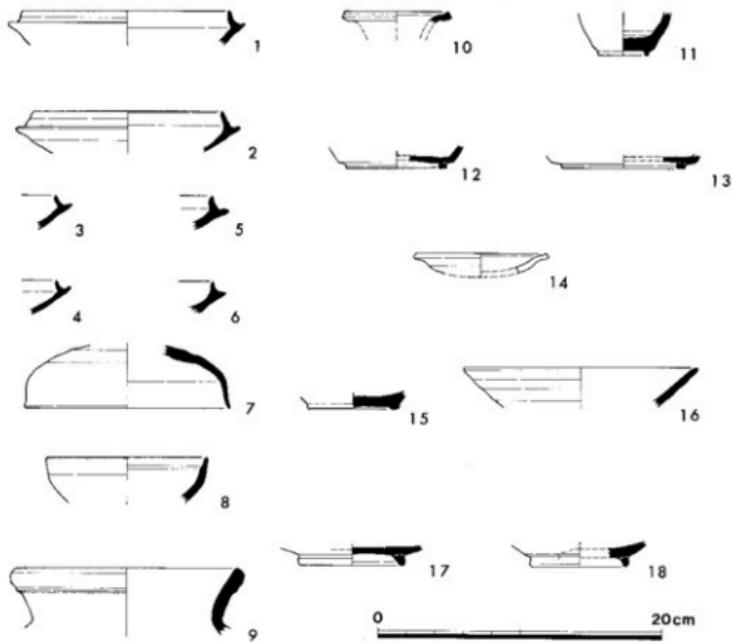


fig. 342 出土土器実測図 2・3：ピット 他：包含層 15・16：緑釉陶器 17・18：灰釉陶器

3.まとめ

今回の調査では、遺構としては掘立柱建物が3棟確認されたのみであるが、その建物群の配置を見ると、SB01、02は平行し、SB01、03は平行かつ北柱筋をそろえて建てられている。これは建物群の建築時に於ける計画性を推測させる。このような建物配置の計画性が多く指摘されるのが、やや後の時代からであることや、その大部分が地方豪族出身である郡司の行政機関である郡衙（郡家）が周辺の地名となっていることなどを考えれば、これらの掘立柱建物が当時の豪族層と何らかの関係を持っていたとも考えられる。

また、10世紀代の緑釉・灰釉陶器等が出土したことは、当時の郡衙関係遺構が付近に存在する可能性を示すものと考えられる。

すみよしみやまち
21. 住吉宮町遺跡—第4次—

1. はじめに

住吉宮町遺跡は六甲連山に源を発する住吉川および石屋川によって形成された扇状地上に立地し、標高約20m、海岸からの距離にして約1.1kmを測る。

住吉宮町を含む東灘区周辺は早くから市街化が進み、埋蔵文化財の存在については未知の状態に近かった。近年この市街地にも再開発の波があり道路・マンション等の工事に先立って発掘調査が行われ、今まで未知であった遺跡も周知のものとなりつつある。

昨年度、当調査地区の西隣のマンション建設工事現場において、鎌倉時代前半の土坑と遺物が発見された。これが住吉宮町遺跡の発見の契機となった第1次調査地区である。さらに、西側の第2次調査地区も、マンション建設工事に先立つもので、建物基礎部分で遺跡が破壊される部分についてのみ発掘調査を実施した。

第1・2次調査における成果には、弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の土坑等の発見・古墳時代後期前半の小型方墳11基の発見・古墳時代後期～終末期の土坑・ピット・河道等の発見が挙げられる。

今回の調査も、第1・2次調査同様、マンションの基礎部分で埋蔵文化財が破壊される部分についてのみ行うという方針で進めた。建物基礎底面が前面の国道2号線北側の舗道レベルよりマイナス1.5mで仕上げられるため、調査も基本的にはこの深さまで行うという申し合わせをかわした。なお、調査区の設定はfig.344のとおりである。



fig. 343
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査においても、大きく分けて3時期の遺構面を確認した。古順にそれぞれをⅠ期（古墳前期初頭）・Ⅱ期（古墳後期初頭）・Ⅲ期（古墳時代後半～奈良時代）と呼称し、以下主な遺構・遺物について述べていく。

(1) I 期

褐色粘質土から成る遺物包含層と若干の遺構を検出した。なお、申し合わせを行ったため、調査区西南部では乳褐色細砂～Gran. から成る遺構面が検出できていない。

S K01

3区で検出した不整形の土坑で、長さ1.1m以上、幅80cmを測る。若干の土師器片を検出しただけである。

S X10

7～9区で検出したS X07と重複する畦畔状遺構である。調査区において北東から南西にかけて徐々に下がっていく基盤層に直交して形成されている。最大幅70cm、最大高10cmを測る。

遺 物

出土した遺物のほとんどは包含層中のもので、特にS X10の東側にあたる10区ではややまとまった土器量を得ている。器種は、壺・甕・高环をはじめとして、当該期のものがほぼ揃っていると言えるが、概して小片が多い。この中には、生駒西麗産と考えられる甕(fig.354-1)が含まれる点は特記できる。さらに、13区の遺構面上より水晶製切子玉1点を検出している。

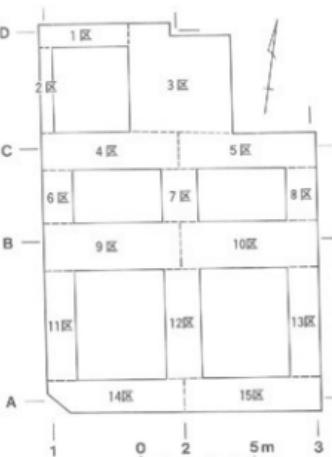


fig. 344 調査地地区割設定図



fig. 345
I期遺構面全景(南から)

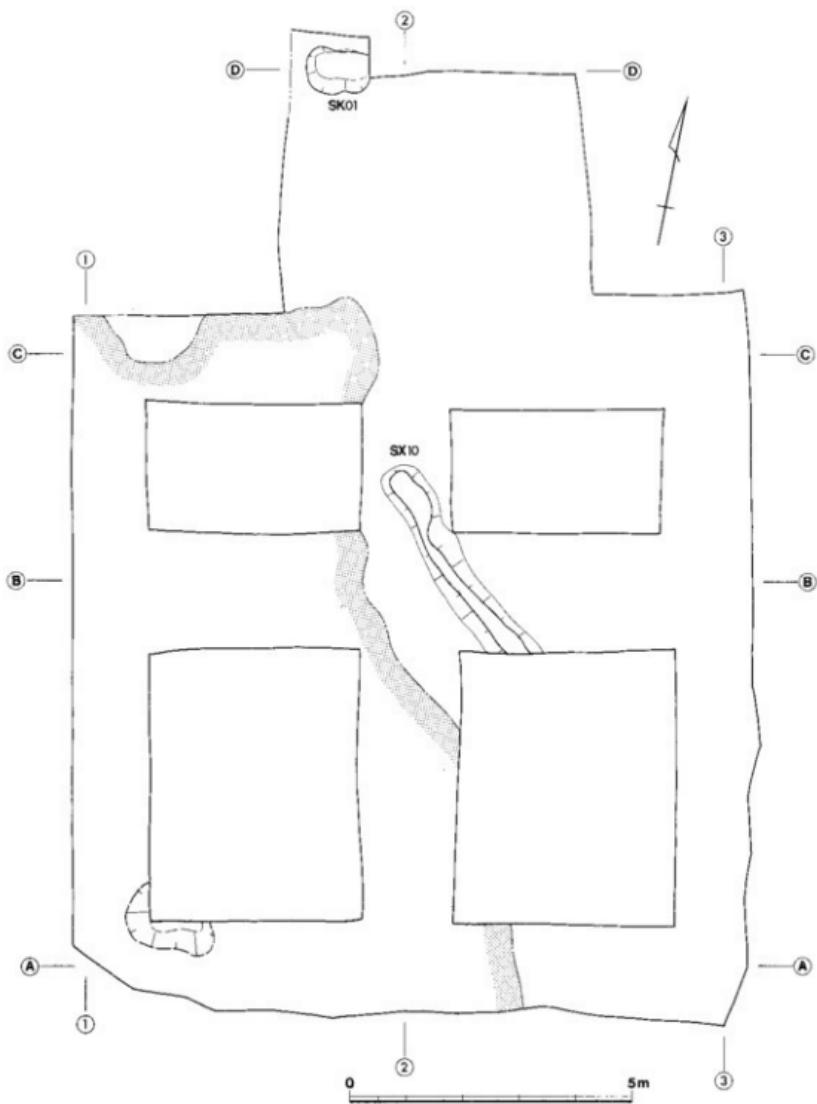


fig. 346 I期遺構平面図

(2) II 期 I期の包含層上面を基盤層として遺構が営まれる。I期と同様基盤層は北東部から南西部へと下がっている。

S X 05 南西隅を搅乱によって欠くが、最大幅1.2m、深さ16cmを測る。仮に、これが古墳の周溝であれば一辺約5mの方墳と言えるが、明確にしめていない。

S X 06 溝状遺構のコーナー部である。第1次調査地区で検出された11号墳の周溝に続くものと思われる。

S T 01~03 3区・9区・14区で検出した花崗岩を使用した箱式石棺である。特に、S T 02は丁寧な造作で、直径約3.5m、高さ約10cm弱の盛土を施し、その上に指標として人頭大の花崗岩を2石置いている点が注目される。

住吉宮町遺跡 箱式石棺一覧表 (単位: cm)

	墓域規模	棺 規 模	蓋石の数	主軸方向	出土遺物	備 考
S T 01	106×85以上	60×31以上	2	東 西	な し	長側壁石材は南傾している
S T 02	104×77	70×25	3	南 北	な し	
S T 03	? × ?	? × ?	?	南北?	須恵器壺身・壺 (TK47型式)	小口部石材のみ 確認



fig. 347 II 期遺構面

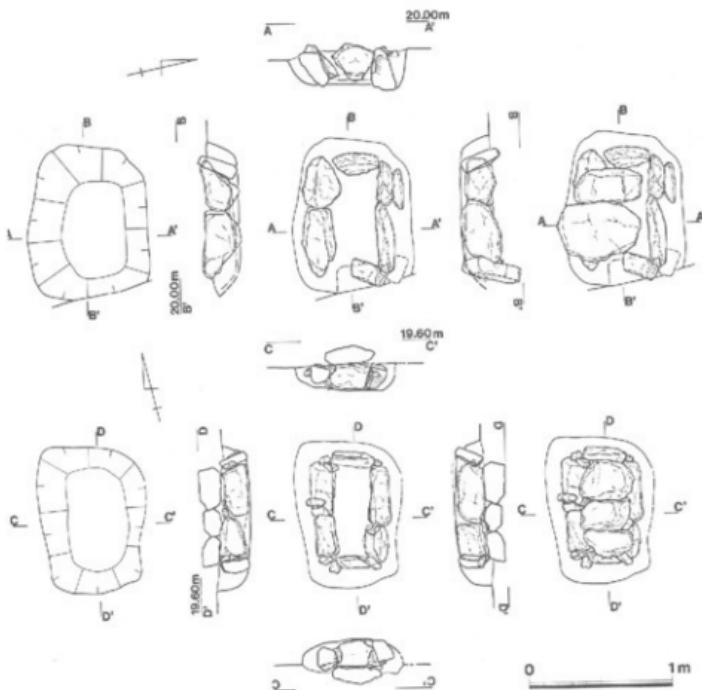


fig. 348 ST01・02 平面・断面図

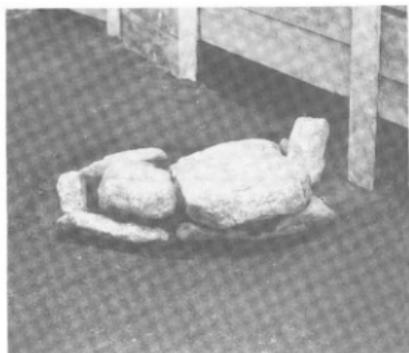


fig. 349 ST01

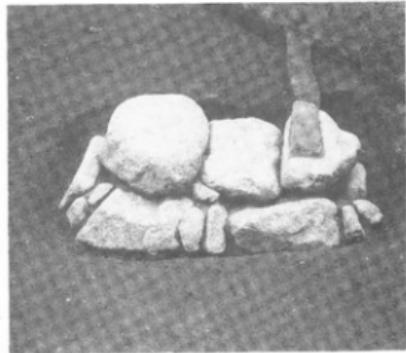


fig. 350 ST02